



JAAGA だより

日米エアフォース友好協会
Japan-America Air Force Goodwill Association

発行：日米エアフォース友好協会
〒160-0002
東京都新宿区四谷坂町9番7号
ZEEKS 四谷坂町ビル3F
編集：JAAGA 事務局
印刷：東伸社
ホームページ：http://www.jaaga.jp/

令和4年度JAAGA総会開催

JAAGA Annual Convention held on 12 May 2022

令和4年5月12日(木)14時からJAAGA事務所において、令和4年度総会が開催された。



JAAGA Annual Convention held at JAAGA office and online sharing

今回も、コロナ禍の影響を受け、通常の形での総会実施が叶わず、各会員への事前の資料送付による審議、ハガキ返信による議決権行使/委任、承認/不承認を確認・集計した上で、最少の出席者に絞った役員・筆頭理事等による審議を経て、議決される形となった。本総会においても、昨年同様リモート会議ソフトを使用した審議状況等の配信が行われた。昨年の経験を踏



Observe a moment of silence for JAAGA passed away members

まえ、準備に万全を期し、総会に臨んだ。

前原副理事長の司会により、以下の議事項目の順で審議され、全議案が案のとおり議決された。

- 1 開会の辞
- 2 黙祷

令和3年6月1日ご逝去された故大村平様、令和3年7月19日ご逝去された故坂外志雄様、令和3年11月24日ご逝去された故安永英信様のご冥福を祈り、黙祷が捧げられた。

3 会長挨拶(要約)

「今日は令和4年度の総会ということで、ZOOMの参加の方たちも含めまして、参加本当にありがとうございます。令和3年を振り返りますと、やはりコ



President Sugiyama presides over the meeting

ロナに振り回された一年だっと感じます。なかなか活動が難しい中で工夫しながらできる範囲では最大限のことができたのではないかと考えています。活動に関わった皆さんの活動及び気持ちに対して心から感謝を申し上げたいと思います。昨今の情勢を見ると、やはりウクライナの問題があり、始まって2か月半くらいになりますが、まだまだ行方が分からない状況です。その中で一つだけはっきりしているのは、同盟関係が非常に重要であるということです。振り返って、太平洋地域を考えた時に、やはり日米同盟は欠かせない要素であるということ。そういう意味で同盟とは、いつ

～ だより第62号目次 ～

令和4年度JAAGA総会開催	1	米空軍の将来動向について(その3)	29
コープ・ノース22参加隊員を激励	4	杉山会長ラップ中将表敬	35
日米相互特技訓練を激励・支援	7	米空軍横田基地の行事に参加	35
令和3年度日米優秀隊員表彰	8	令和4年度JAAGA事業計画	37
令和3年度JAAGA嘉手納基地等研修	12	賛助会員の皆様へ	38
米空軍士官学校留学生支援「日光研修」	17	投稿募集のご案内/JAAGAグッズの紹介	38
スペシャルオリックス支援	19	新入会員紹介	39
SPORTEX '21-B	20	令和4年度JAAGA役員/JAAGA退任役員	39
米空軍将校 航空自衛隊勤務だより	22	会員募集	40
航空自衛隊コーナー	24	編集後記	40
米空軍コーナー	27		

も申し上げますけれども、常に継続的、常続的に手をかけていかなければならないところがある。非常に大変なマターではあるけれども常に日米関係の強化、深化を考えなければいけない。JAAGA としてもその一翼を担っていることを強く意識しなければならないと思っていますところ。

会員の皆様におかれましては、引き続き強い意識をもって、楽しみながら積極的に参画をお願いしたいと思っています。今日の総会は、一年の締めくくりであることもあり、しっかりと締めていきたいと思っておりますので、ご協力をお願いします」

4 議事審議

司会から「会則第9条の2第2項において、総会は

正会員の1/3以上の出席により成立し、議決は出席者の過半数の同意によると規定されているところ、本日現在の正会員257



Vice Chairman Maehara hosts JAAGA Annual Convention

名、郵送による議決権行使29名、議長への議決権委任者の229名で100%の出席者となっており、本総会の成立条件が満たされている」旨が報告された。以降の議案審議については、会則に則り、杉山会長が議長を務め、整齊と進行された。

【第1号議案 令和3年度事業報告(案)】

平本企画理事から「COVID-19感染拡大の影響から、計画された各種事業の多くが中止・取止め、または変更を余儀なくされるなかで、各種の工夫を凝らして事業の推進を図り、航空自衛隊と米空軍との相互理解及び友好親善の増進に努めた」との事業実績の概要、令和3年3月31日現在の会勢「正会員258、個人賛助会員89、団体賛助会員2、法人賛助会員等32、名誉会員20、計400」が報告された。続いて、計画した事業の多くが中止される中、感染防止を万全にしつつ創意工夫をもって実施された次の事業等が報告された。

- ・レッド・フラッグ・アラスカ参加隊員の激励のため航空総隊司令部を訪問
- ・コープ・ノース22参加隊員の激励のため航空総隊司令部、航空支援集団司令部を訪問
- ・新型コロナウイルス感染拡大の影響により、JAAGA 会長執行による「表彰式」を実施できたのは横田基地

における米軍人表彰式だけであり、その他は、日米それぞれの基地司令等からの「表彰伝達式」が実施された。

- ・日米隊員の交流活動(日米相互特技訓練)等激励のため5空軍司令部及び航空幕僚監部を訪問
 - ・防大留学米空軍士官学校学生の研修支援
 - ・スペシャルオリンピックスの支援(横田、三沢)
 - ・SPORTEX'21の実施
 - ・指揮官交代行事への出席(第5空軍司令官、第18航空団司令官)
 - ・米空軍協会(AFA)総会へは規模を縮小して参加、成果報告会を航空幕僚監部、航空総隊司令部、開発集団司令部、幹部学校において実施し、会員に対する報告会は中止した。
 - ・クリスマスカードについては例年通り送付
 - ・嘉手納基地等研修を実施
 - ・会誌について、第60号及び61号を発行及び配布、同会誌に「米空軍コーナー」を設け、第5空軍からの情報提供に基づき記事を掲載
 - ・一般広報として、ホームページの運営、パンフレットの作成、グッズの贈与を継続
 - ・総会については、グランドヒル市ヶ谷において参加者を限定して実施、郵送方式により議決を実施し全議案承認、試験的に希望者に対しZOOM配信
 - ・なお、例年総会に併せて実施してきた記念講演、懇親会は取り止め
 - ・会員名簿を作成、配布
 - ・役員会、理事会については、リモートにて実施
 - ・令和4年4月に会計及び物品監査を実施
- ※第1号議案は、案のとおり議決された。

【第2号議案 令和3年度決算報告(案)】

宮本財務理事から「会費(減額)の納入状況は良好であり、コロナ禍の影響により、行事は一部中止となったものの、三密の局限等、対策を講じつつ、実施を追求した」と報告された。



The second item is explained by Finance director Miyamoto

続いて、収入及び支出の細部が報告され、「会費の納入率は予算額比113%」であること、支出においては、「予算執行率

約 85% で、事業費は約 85% であり、運営管理費は約 93% となった」ことが報告された。また、「創立 30 周年記念のための積立 30 万円を実施し、累計 150 万円（平成 29 年度から継続）となった」ことが報告された。

続いて、内山監事から「会計監査において財務の報告のとおり異常の無いことを確認した」ことが報告された。

※ 第 2 号議案は、案のとおり議決された。

【第 3 号議案 令和 4 年度事業計画（案）】

平本企画理事から「新型コロナウイルス感染拡大防止の措置に配慮し、様々な工夫を凝らしつつ各種事業の実施に努める

ことにより、航空自衛隊と米空軍との相互理解及び友好親善の増進に寄与するとともに、会勢の拡大等運営管



Screenshot of the report article for the third item

理態勢の更なる充実を図る」との事業運営方針が報告され、計画案の細部が報告された。ただし、米空軍要人等の講演は新型コロナウイルス感染拡大の影響により取り止めること及び空幕部長等講演については Web 形式による実施も検討することが報告された。

※ 第 3 号議案は、案のとおり議決された。

（「令和 4 年度事業計画」〔37 ページ〕参照）

【第 4 号議案 令和 4 年度徴収会費の変更（案）】

前原副理事長から「令和 3 年度は、2 年度決算での執行状況を踏まえて、徴収する会費を減額したが、令和 4 年度については、3 年度予算の執行状況（約 85%）から徴収する会費を会則に定める金額とする。」と報告された。

※ 第 4 号議案は、案のとおり議決された。

【第 5 号議案 令和 4 年度予算（案）】

宮本財務理事から「効率的な予算執行及び的確な会費徴収により、良好な財務状況を維持（令和 4 年度への繰越：約 921 万円）しており、令和 3 年度の執行状況（約 85%）に鑑み、本年度会費は正規会費を徴収する、また創立 30 周年記念行事に向け、平成 29 年度から当面 5 年間、30 万円／年を積立する」との財務状況の分析に基づき、「①活動の再開に備え、各事業を効果的かつ着実に実施し得る予算を編成、②過去の執行状況を分析し、新規を含め適切な予算を積算する、③予算

の積算にあたっては、コロナ禍での活動を考慮した対応を明確化、④創立 30 周年記念行事の積立（30 万円／年）を継続する」との予算編成方針が報告された。

○質疑応答

Q：AFA 総会への参加予算の内訳はどのようになっているのでしょうか。

A：過去の実績等を踏まえ、担当理事から適切な額として申請されました。管理費、運営費については例年と同様のものです。

Q：仮に今回の訪米で、AFA 会員の保有する日本刀を移送する場合、その経費は予備費と考えてよいのでしょうか。

A：予備費を使うものと考えています。

※ 第 5 号議案は、案のとおり議決された。

【第 6 号議案 役員を選任（案）（敬称略）】

杉山議長から、令和 3 年度役員を選任案「会長：杉山良行（継続）、副会長：福江広明（継続）、上田知元（継続）、小野賀三（新任）、監事：内山隆弘（継続）、山本祐一（継続）」が提示された。

※ 第 6 号議案は、案のとおり議決された。

以上のように、第 1 号議案から第 6 号議案を通して円滑かつ活発な審議が行われ、全ての議案が案のとおり議決された。

また、その他報告として小野理事長から、役員会で選任された 5 名の新理事「朝倉讓、岩崎仁彦、荒木哲哉、金古真一、上ノ谷寛」が報告された。

5 新役員等、退任者、顧問委嘱の紹介

司会から新役員等が紹介されるとともに、参加者一同が拍手で今後の活躍に期待を示した。加えて理事の所掌分担、新三沢支部長、支部長・支部事務局長、退任者それぞれの紹介がなされた。

（「令和 4 年度役員」、「JAAGA 退任役員」〔39 ページ〕参照）

6 閉会の辞

昨年同様参加者を局限しつつ、リモート会議ソフトを使用した審議状況等の配信を行いながらの総会となったが、各担当者等の入念な準備もあり、約 45 分ですべての審議を終了した。

（浅井理事記）

コープ・ノース 22 参加隊員を激励

JAAGA cheers Koku-Jieitai Participants in Cope North 22



Participants in Cope North 22 stand together for a group on the flight line at Andersen Air Force Base, Guam, on Feb 5, 2022 before starting the exercise (from 5th AF HP)

航空自衛隊は、「自由で開かれたインド太平洋」の維持・強化に資するため、コープ・ノース 22 (Cope North22 : CN22) における日米豪共同訓練及び人道支援・災害救援共同訓練を実施した。

JAAGA は、小野理事長（山田理事、福永理事同行）が 2 月 15 日（火）、横田基地に航空総隊司令官内倉浩昭空将（幕僚長亀岡弘空将補同席）、府中基地に航空支援集団司令官森川龍介空将を訪ね、CN22 における「日米豪共同訓練」及び「人道支援・災害救援共同訓練」に参加している航空総隊及び航空支援集団の訓練部隊へ事前に送付した激励品の



JAAGA Chairman ONO, Director Yamada and Director Fukunaga call on Lt Gen Uchikura, Commander of Air Defense Command, & Maj Gen Kameoka, Chief of Staff, in Yokota AB (↑), and Lt Gen Morikawa, Commander of Air Support Command, in Fuchu AB (↓) on Feb.15



目録を両司令官に手交し、訓練の成功を祈念した。

1978 年に三沢基地で四半期毎の日米共同訓練として始められた「コープ・ノース」は、1999 年にグアム島

アンダーセン空軍基地に実施場所を移し、今回で 22 回目を迎えた。今回は初めて航空救難団の UH-60J を C-2 輸送機に搭載して空輸し訓練に参加させる等、航空自衛隊の参加部隊及び演練内容は充実したものになっているとのことである。

航空総隊司令官及び航空支援集団司令官からは、デルタ株から新オミクロン株へ変異したコロナ禍において、今年も昨年に引き続き感染拡大防止を図りながら訓練を実施し、足元の厳しい任務環境にあっても、やるべきことはしっかりやっていくという力強い言葉とともに、JAAGA の支援に対して謝辞が述べられた。

小野理事長からは隊員の活躍を誇りに思う旨を伝えるとともに JAAGA の活動への日頃の協力に謝意を述べた。



← Lt Gen Morita, Vice Commander of Air Defense Command(right), hands over the gifts from JAAGA to Col Miyake(left), commander of Koku-Jieitai team, in CN22 at Andersen AFB



← Members of Koku-Jieitai team in CN22 receive gifts for successful training from JAAGA at Andersen AFB

(福永理事記)

寄稿 コープ・ノース22に参加して ①
 訓練実施部隊指揮官
 第8航空団飛行群司令 1等空佐 三宅 英明



U.S. Air Force, Royal Australian Air Force, Koku-Jieitai, regional allies and partners aircrafts participate in a close formation taxi, known as an Elephant Walk (Left), and U.S. Air Force, Royal Australian Air Force and Koku-Jieitai fighters fly in a close formation (right), during Cope North 22 at Andersen Air Force Base, Guam, Feb 5 (Photos by USAF)

JAAGA 会員の皆様におかれましては、ますますご清栄のことと存じます。コープ・ノース期間中、訓練半ばの日本が恋しくなったまさにその時、故郷の味（皆様からの激励品）が届き、隊員の士気が高揚するとともに、最後まで全力で訓練に取り組み所要の成果を収めることができました。会員皆様から賜りましたご厚志に対し、訓練参加者を代表して衷心よりお礼申し上げます。

さて、コープ・ノースは日米豪3か国が主体となって計画する共同訓練であり、航空自衛隊が国外訓練の中でも重要視している訓練の1つです。参加隊員は、昨年同様、行動制限を設け感染防止対策を実施しつつ、不自由な環境でも懸命に任務を遂行してくれました。

今回、グアムという恵まれた訓練環境下において、

防空戦闘訓練、F-2による空対地射爆撃訓練、空中給油訓練等の日米豪共同訓練のほか、搜索救難訓練、機動展開訓練や航空患者搬送訓練等の



F-2 pilot and maintenance crew are starting engines and checking systems before taxiing at Andersen AFB

人道支援・災害救援共同訓練を実施しました。航空自衛隊のトンガ王国における国際緊急援助活動への参加

のため、例年よりも一部訓練項目を縮小していますが、

搜索救難訓練へのUH-60Jの初参加（C-2での輸送を含む）、機動展開訓練の内容の拡充といったより実効的な訓練を実施す



ることができました。

First participant UH-60J in CN at Andersen AFB conducts SAR training

日米豪共同訓練においては、航空自衛隊参加部隊の対処能力のレベルや向上すべき能力を把握し、各軍との連携要領・相互運用性の向上を図ったほか、米豪空軍の優れた企画運営・作戦指導能力など多くの教訓を得ることができました。また、人道支援・災害救援共同訓練においては、「自由で開かれたインド太平洋」というビジョンを共有するマレーシア、シンガポール等のオブザーバー参加がありました。本訓練を通じ、インド・太平洋地域の平和と安定に向けた連携・結束について内外に発信することができたものと考えています。

末筆ながら、会員皆様のご健康とご多幸をお祈り申し上げます。私の所感とさせていただきます。

寄稿 コープ・ノース22に参加して ②

航空支援集団訓練統制官 航空総隊司令部 1等空佐 小林 幹生

(訓練当時 航空支援集団飛行支援課長)

航空支援集団は、1月19日から3月6日までの間、コープ・ノース22に参加(展開、撤収等を含む)し、実戦的訓練環境の下、部隊の戦術技量、日米共同対処能力及び参加国との連携要領の向上を図りました。コロナ禍であっても関係国との連携強化は重要であることから、参加者一人一人がルール(外出禁止、黙食、2m以上の距離確保等)を守る等、万全な感染予防対策を講じることにより、訓練目的を達成することができました。

今年は、特に、即応機動訓練において大きな成果を達成することができました。これは仮想島嶼国(テナアン島)において台風被害が発生し、同国の要請に基づきHA/DR(Humanitarian Assistance/Disaster relief)を日米豪で実施するという想定で、部隊派遣に係る各種活動を演練



USAF, RAAF, and Koku-Jieitai participants have meeting to understand the capability each other

しました。まず、展開前にアカデミーブリーフィングを実施し互いが持ち得る能力(capability)を把握しました。その後、それぞれの役割(role)と任務(mission)を明確にし、被災地(テナアン島)へ展開、飛行場の開設(戦力発揮基盤の構築)を行いました。被災地(テナアン島)では、本邦で養成したMCA(multi capable airman:多職種技能を習得した隊員)を中心に航空管制業務、気象業務、通信業務、医療業務、施設業務を日米豪で行い任務を完遂することができました。被災地(テナアン島)での活動は、連日30°Cを超える炎天下、連続状況下で活動を行うことで過酷な状況での任務遂行能力を向上させることができました。食事はすべてMRE(meal ready to eat:パック飯)のみでしたが、栄養が偏らないよう栄養補給が考慮された食品が1袋にまとめられており、食事が任務に支障を与えることはありませんでした。更に、JAAGAの皆様から頂いた栄養ドリンクなどの激励品が大きな励み(活動の原動力)になったことに御礼申し上げます。

5日目に被災地(テナアン島)の仮想隣国から脅威を受けたという設定で再機動計画を3ヶ国で立案し、6日目にはグアム本島へ帰投、その後、再び他の飛行



Aeromedical evacuation training for HA/DR at Tenian

場(グアム本島内にあるノースウエスト飛行場)へ再展開しTJNO(Transportation of Japanese Nationals Overseas:在外邦人等輸送)訓練を3日間実施しました。

こうしてコープ・ノース史上初となる計9日間に及ぶ即応機動訓練は多くの成果を達成するとともに、米豪から多くの教訓を獲得、今後の能力向上の資を得るこ



Damage restoration training at Northwest Airfield in Guam

とことができました。また、即応機動訓練のほかに空中給油訓練を実施し(KC767参加)、若年操縦士の海外における任務遂行能力も向上させることができました。



Koku-Jieitai F-15J Fighters receive air refueling from Koku-Jieitai tanker KC-767 (right) and operators onboard (left)

今後は、更に過酷な環境下であっても、任務が遂行できる能力獲得にむけ進化を遂げる所存です。訓練の成果が実戦で活かせるよう引き続き精進してまいります。

日米相互特技訓練を激励・支援

JAAGA cheers and supports Japan-U.S. Bilateral NCO Exchange Program

3月30日(水)、福江副会長(山田企画理事及び太田広報理事同行)が、横田基地に第5空軍副司令官コシンスキー少将(Maj Gen Leonard Kosinski, Deputy Commander, Fifth Air Force)を訪問し、日米相互特技訓練の激励を実施した。



技訓練については、非常に重要なプログラムであり、今後益々充実すべきとの認識が共有されたことに加え、空自隊員8名が参加し、訪問前週に実施された横田基地受入れの訓練においても、大きな成果を挙げたとの報告があった。

令和3年度の日米相互特技訓練は、コロナ

JAAGA Vice President Fukue (left) and Maj Gen Kosinski, Deputy Commander of 5th AF (Right)

また、“Fighting Fifth Booster Club”

禍の影響を受け、例年の訓練規模より縮小され、空自受入れ訓練が岐阜、那覇の2基地、米空軍受入れ訓練が横田基地として調整されてきたが、岐阜基地における訓練が中止され、昨年10月の空自那覇基地での訓練及び本年3月22日(火)から25日(金)で行われた米空軍横田基地での訓練の2回となった。

代表スノー氏からもJAAGAからの心温まる支援への感謝が述べられた。

話題は、ロシアによるウクライナ侵略などの欧州情勢、世界情勢、インド太平洋及び日本を取り巻く情勢等にも広がり、活発な意見交換となった。中でもインド太平洋における備えの重要性、とりわけ日米同盟の

コシンスキー副司令官との懇談には、第5空軍司令部参謀長セトカ大佐(Col Dominic Setka, Chief of staff, HQ Fifth Air Force)、第5空軍最先任上級曹長代理ダンフォード最上級曹長(CMSgt Sean Danford, HQ Fifth Air Force)、第5空軍の軍人相互・支援組織“Fighting Fifth Booster



Talking about Japan-U.S. bilateral NCO Exchange program and wide variety of subjects

Club”代表のスノー氏(Ms Jessica Snow, President, the Fighting Fifth Booster Club)が同席された。

実効性向上が重要であるとの認識を共有した。

福江副会長からは、多忙な時期での訪問受け入れに対し謝意が述べられるとともに、様々な場面における日米空軍種間の緊密な連携・協力、活躍に対し敬意が表された。コシンスキー副司令官からは、空自と米空軍の関係は継続的に強化されてきており、お互いに心強いパートナーであるとの認識、そして日頃からのJAAGAの支援に対する謝意が述べられた。日米相互特

令和4年度においては、コロナ禍で減じられた訓練機会が復活し、更に充実した訓練となるように期待したい。

なお、3月に米空軍横田基地で行われた訓練の状況や日米参加者の所見等については次号で紹介する。

(太田理事記)

令和3年度日米優秀隊員表彰

JAAGA AWARD for Koku-Jieitai & USAF Brilliant Soldier in FY 2021

令和3年度のJAAGA日米隊員表彰式は、コロナ禍の状況に鑑み、米空軍横田基地を除き、被表彰者所属基地の基地司令等からの表彰伝達という形で行われた。米空軍横田基地においては、基地司令官の意向を受けて基地内の司令部庁舎前において限定された人員ではあったが表彰式として実施することができた。

また、米空軍嘉手納基地においては、JAAGAの嘉手納基地研修に日程を合わせ、基地内の国旗掲揚台前において、研修団長はじめ研修団員が陪席した形で伝達式が実施された。
(深瀬理事記)

三沢地区表彰式 Misawa area (Misawa AB)

今年度の三沢地区JAAGA表彰行事は、昨年度に引き続き日米それぞれの基地司令及び司令官に依頼して表彰伝達式の形で被表彰者へ表彰状と盾の授与が行われた。

【空自三沢基地 (Misawa AB, Koku-Jieitai)】

2月8日(火)、三沢基地応接室で、表彰伝達式の執行者である三沢基地司令久保田隆裕空将補、被表彰者である第3航空団司令部小向靖博1等空曹の他、小向1曹の上司である第3航空団司令部装備部長、第3航空団准曹士先任が同席し、実施された。

小向1曹は、第3航空団司令部装備部輸送係として、航空自衛隊F-35A戦闘機の揚収品の米国への円滑な輸送のための米空軍空輸員との協力、日米空輸員の職場交流の推進、さらには2021年太平洋空軍主催の空港業務競技会における米空軍空輸員との混成チームでの参加による総合優勝の獲得等、航空自衛隊と米空軍の友好親善と相互理解の増進に貢献した功績が認められた。

式では、久保田基地司令から小向1曹に表彰状と盾が贈呈され、基地司令の祝辞では、「2021年太平洋空軍主催の空港業務競技会」における



Award from Maj Gen Kubota, Commander of Misawa AB, to MSgt Komukai

総合優勝の支援に多大な貢献があった第35戦闘航空団カロ3等軍曹も同表彰を受けていたことから、日米両被表彰者に対するお祝いの言葉が述べられた。そして、「三沢基地は、日米運用部隊が同じ地に所在するという恵まれた環境を活かし、今回表彰されたお二人

を模範とし、より一層強固な友情を築いて参ります。日米間での友情をより強固にするために本表彰をいただいた杉山会長をはじめとするJAAGAの皆様には厚く御礼申し上げます」との決意と感謝が述べられた。その後、記念撮影へと進み、式は滞りなく実施された。

小向1曹から「このような栄えある賞を頂けたことに心から感謝します。引き続き日米隊員の相互理解、パートナーシップの深化と日米輸送連携能力の進化を図っていきます」とのコメントを頂いた。



A Commemorative shield is presented

【米空軍三沢基地 (Misawa AB, USAF)】

3月8日(火)、米軍格納庫949で、表彰伝達式の執行者である米軍三沢基地司令官ジェシーJフリーデル空軍大佐 (Col Jesse J. Friedel)、被表彰者である第35戦闘航空団第35任務支援群第35装備準備隊 トリスタンN.カロ3等軍曹 (SSgt Tristan N. Caro) の他、カロ軍曹の上司や先任、職場の仲間等約30名が参加し、被表彰者本人にはサプライズという形で実施された。



SSgt Tristan N. Caro stands with his team after receiving Award

カロ軍曹は、航空輸送に関する優れた指導者として、レッド・フラッグ・アラスカ演習における航空自

衛隊の円滑な戦力展開のための空輸調整、航空自衛隊 F-35A 戦闘機の揚収品輸送での輸送機への安全な積載、さらには 2021 年太平洋空軍主催空港業務競技会に参加した航空自衛隊員の訓練指導による総合優勝への貢献等、航空自衛隊と米空軍との友好親善及び相互理解の増進に尽力した功績が認められた。

式では、フリーデル基地司令官からカロ軍曹に表彰状と盾が贈呈され、基地司令官から「カロ軍曹は、迅速効率的に装備品を航空機に積載できるよう要員を訓練し、航空自衛隊の装備品の国外輸送にも貢献したが、彼が米国内のみならず日米両国間のチームワークに焦点を置いてきたことが、JAAGA アワードの受賞に繋がった」とのお祝いの言葉があり、カロ軍曹から「この賞には私の三沢基地での 4 年間の蓄積が反映されています。その間、航空自衛隊そして航空輸送に関わる関係者との特別な時間を共有してきました。彼らのプロ意識と学ぶことへのひた向きさは、二国間相互の任務を達成するために働く私の活力となっています」とのコメントを頂いた。

その後、記念撮影へと進み、式は無事に終了した。

(大浦理事記)

関東地区表彰式

Kanto area (Yokota, Fuchu & Iruma AB)

関東地区 JAAGA 表彰行事は、それぞれの基地において次のとおり実施され、航空自衛隊側被表彰者は、作戦システム運用隊 北本浩之空曹長（横田基地）、宇宙作戦隊 藤井美奈子 1 等空曹（府中基地）及び第 2 輸送航空隊 久米村香 3 等空曹（入間基地）の 3 名であった。また、米空軍側被表彰者は、第 374 空輸航空団 エミコ パーキンス大尉（Capt Emiko Perkins）であった。

【空自横田基地 (Yokota AB, Koku-Jieitai)】

2月18日（金）、基地会議室において、作戦システム運用隊司令兼横田基地司令伊豆原隆志 1 等空佐を執行者とし、同副司令内康弘 1 等空佐以



Award from Col Izuhara, Commander of Yokota AB, to CMSgt Kitamoto

下 15 名の同席の下で表彰伝達式が実施された。

北本曹長は、連合准曹会横田支部長として、日米の各種イベントにおいて、円滑な運営支援、企画運営及

び参加調整に献身的に尽力したことが認められて表彰された。伝達式においては、基地司令の訓示の後、北本曹長から、「これまで様々なイベント等に参加、協力し、貢献できて良かった。これからも日米友好のために他隊員と頑張りたい」とのコメントがあった。

【空自府中基地 (Fuchu AB, Koku-Jieitai)】

2月21日（月）、基地特別会議室において、気象群司令兼府中基地司令阿蘇晋一 1 等空佐（当時）を執行者とし、宇宙作戦隊長阿式俊英 2 等空佐以下 3 名の同席の下で表彰伝達式が実施された。



Award from Col Aso, Commander of Fuchu AB, to MSgt Fujii

藤井 1 曹は、日米宇宙状況監視に係る机上演習の担当空曹として、机上演習本番における運用要領の普及や運用開始後の米軍との連携による対応要領の策定に寄与する等、航空自衛隊と米空軍との友好親善及び相互理解の増進に献身的に尽力したことが認められて表彰された。伝達式においては、基地司令の訓示の後、藤井 1 曹から「宇宙領域における二国間・多国間の強固な協力関係の更なる相互理解に努めたい」とのコメントがあった。



久米村 3 曹は、米空軍下士官資質向上セミナーへの参加を通じて米軍横田基地隊員との積極的な交流を図るなど、相互理解の増進に尽力するとともに、後輩隊員に日米交流の重要性を意識付けたことが認められて

【空自入間基地 (Iruma AB, Koku-Jieitai)】

2月14日（月）、T-1673 格納庫での部隊朝礼において、第 2 輸送航空隊司令一木秀徳 1 等空佐を執行者とし、同副司令川口裕史 1 等空佐以下約 200 名の参列の下で表彰伝達式が実施された。

久米村 3 曹は、米空軍下士官資質向上セミナーへの参加を通じて米軍横田基地隊員との積極的な交流を図るなど、相互理解の増進に尽力するとともに、後輩隊員に日米交流の重要性を意識付けたことが認められて



Award from Col Ichigi, Commander of the 2nd TAG, to SSgt Kumemura

表彰された。伝達式においては、2 輸空隊司令の訓示の後、久米村 3 曹から「米空軍との交流を心から楽しんだことが評価につながり受賞できて光栄です」とのコメントがあった。

【米軍横田基地 (Yokota AB, USAF)】

3 月 9 日 (水)、米軍横田基地 第 374 空輸航空団司令部庁舎前の東日本大震災「トモダチ」作戦を記念して植樹された白梅の下で、第 374 空輸航空団司令官キャンベル大佐 (Col Andrew J. Cambell) 立会のもと表彰式が執行され、杉山良行 JAAGA 会長から被表彰者に対して賞状と盾が授与された。



Award from JAAGA President Sugiyama to Capt Perkins

パーキンス大尉 (Capt Emiko Perkins) は、日米の各種訓練演習及び交流事業において通訳業務やボランティアとしての英会話教育などにおいて、その日本語能力を遺憾なく発揮し、日米の友好親善、相互理解の増進に献身的に尽力した。また、メディカルリエイゾンとして「東京救急医療サミット 2021」に参加し、航空自衛隊医療チームとのパートナーシップの強化に努めるとともに、航空自衛隊人間病院の開設準備を支援するなど、医療分野における日米相互協力にも貢献した。(新谷理事記)



Commemorative photo of Capt Perkins with Col Cambell, Commander of the 374th AW, President Sugiyama and JAAGA directors

沖縄地区表彰式 Okinawa area (Naha & Kadena AB)

沖縄地区 JAAGA 表彰行事が 2 月 4 日 (金) に航空自衛隊那覇基地で、3 月 15 日 (火) に米空軍嘉手納基地でそれぞれ実施された。

【空自那覇基地 (Naha AB, Koku-Jieitai)】

那覇基地における表彰伝達式は、基地応接室におい

て、第 9 航空団司令兼那覇基地司令高石景太郎空将補を執行者とし、南西航空警戒管制団司令松崎勇樹空将補、南西航空警戒管制団准曹士先任小暮徹准空尉同席の下、執り行われた。

被表彰者は、南西防空管制群防空管制隊渡辺俊之空曹長で、航空自衛隊准曹士先任付として勤務した際に航空自衛隊准曹士先任と米第 5 空軍最先任上級空曹との信頼関係向上に



Award from Maj Gen Takaishi, Commander of Naha AB, to CMSgt Watanabe

貢献するなど、日米の友好親善および相互理解の増進に寄与した功績が認められての表彰であった。

【米空軍嘉手納基地 (Kadena AB, USAF)】

嘉手納基地における表彰伝達式は、嘉手納基地第 18 航空団司令部国旗掲揚台前において、第 18 航空団司令官デイビッド S. エグリン准将 (Brig Gen David S. Eaglin) を執行者とし、同基地研修中の JAAGA 理事、正会員、賛助会員同席の下、執り行われた。

被表彰者は第 18 航空団第 18 運用群ローガンバロー少佐 (Maj Logan Barlow) で、地域における共同訓練において堪能な語学力と経験を活かした通訳や空中給油機教官操縦者として活躍するなどの功績が認められての表彰であった。



Award from Brig Gen Eaglin, Commander of the 18th Wing, to Maj Barlow surrounded by JAAGA members

今年度は、新型コロナウイルス感染予防の観点から各部隊長からの表彰伝達となった。昨年と同様に例年とは異なる形式で実施された本行事に当たり、ご尽力いただいた那覇基地、嘉手納基地のスタッフの皆様へ心から感謝申し上げます。



(渡邊理事記)

受賞者及び功績の概要 JAAGA AWARD 2021 Recipients and their Achievements		
部隊	受賞者	功績の概要
航空自衛隊 第3航空団 (三沢) Misawa		航空自衛隊 F-35A 戦闘機の揚収品の米国への輸送に際し米空軍空輸員と協力して C-5 輸送機への積載を円滑に遂行し、また日米空輸員の職場交流を実施してその中核となって活躍したほか、さらに 2021 年太平洋空軍主催の空港業務競技会に米空軍空輸員との混成チームで参加し総合優勝を果たす等、三沢基地における航空自衛隊と米空軍との友好親善及び相互理解の増進に献身的に尽力 He has especially contributed to the smooth wreckage load of a Koku-Jieitai's F-35A onto the C-5 transport aircraft in cooperation with USAF transportation members and played an active role as a core member of the Japan-U.S. team facilitating communication for the missions. Furthermore, he joined the 2021 multinational Port Dawg Rodeo event as an aerial porter of a USAF / Koku-Jieitai combined team and led the team to the overall victory. All his dedication contributed to the significant advancement of friendship and mutual understanding between Koku-Jieitai and USAF.
	1等空曹 小向 靖博 MSgt Komukai Yasuhiro	
航空自衛隊 作戦システム運用隊 (横田) Yokota		連合准学生会横田支部長として、「ストライダーズ駅伝」や「横田フロストバイト・ロードレース」での自衛隊側の企画・運営を担当し、円滑な大会運営の支援を推進するとともに、横田 TOP 3 主催イベント「SAMURAI FLEX」への参加調整に尽力するなど日米間の各種のボランティア活動を通じた日米交流を推進 As President of Koku-Jieitai Yokota SNCO Association, he has devoted himself to promoting the friendship and mutual understanding between Koku-Jieitai and USAF through various volunteer activities between Japan and the U.S., such as Striders Ekiden and Yokota Frostbite Road Race. He also made efforts to coordinate the participation in the event "SAMURAI FLEX" sponsored by Yokota Top 3. He has achieved great results.
	空曹長 北本 浩之 CMSgt Kitamoto Hiroyuki	
K o k u J i e i t a i 宇宙作戦隊 (府中) Fuchu		日米宇宙状況監視に係る机上演習の担当空曹として、米国での机上演習本番において運用要領の普及や運用開始後の米軍と連携した対応要領の策定に尽力するとともに、PACAF 主催の「Pacific Women, Peace & Security シンポジウム」に参加し、参加国の女性隊員等との積極的な交流を通じて米国をはじめとする友好国との間の相互理解に寄与 She has contributed to promoting the friendship and mutual understanding between Koku-Jieitai and the United States Air Force through coordinating the pre-meeting and exercise preparation and participating in the command post exercise related to the Japan-US Space Situational Awareness, and also contributed to the spread of the operational procedure and draw the response procedure in cooperation with the U.S. military in the CPX in the United States.
	1等空曹 藤井 美奈子 MSgt Fujii Minako	
第2輸送航空隊 (入間) Iruma		2021 年の米空軍下士官資質向上セミナーに参加し、米軍横田基地の隊員との積極的な交流を図るとともに、入間基地准学生会が協力する横田基地開催の「ストライダーズ駅伝」、「スペシャルオリンピックス」などの日米交流行事に参加する等、後輩隊員に日米交流の重要性を意識付けるとともに、航空自衛隊と米空軍との友好親善及び相互理解の増進に献身的に尽力 She has devoted herself to promoting the friendship and mutual understanding between Koku-Jieitai and USAF through participating in Japan-U.S. exchange events such as Striders Ekiden, Special Olympics, etc., held at Yokota Air Base with the support from the Iruma Air Base SNCO Association. She has achieved great results by making junior members aware of the importance of the Japan-U.S. exchanges.
	3等空曹 久米村 香 SSgt Kumemura Kaori	
南西航空警戒管制団 (那覇) Naha		航空自衛隊准曹士先任付として、各種調整及び通訳業務を通じ、航空自衛隊准曹士と米第5空軍最先任上級空曹との信頼関係向上に貢献 As the Assistant to Senior Enlisted Advisor of Koku-Jieitai, he has particularly contributed to strengthen relationships between NCO of Koku-Jieitai and CMSgt of U.S. 5th Air Force through good coordination and interpreting.
	空曹長 渡辺 俊之 CMSgt Watanabe Toshiyuki	
米空軍 第35戦闘航空団 (三沢) Misawa		空輸調整において「レッド・フラッグ・アラスカ」演習では航空自衛隊の円滑な戦力展開に貢献し、また航空自衛隊 F-35A 戦闘機の揚収品輸送では輸送機への安全な積載に寄与したほか、2021 年太平洋空軍主催の空港業務競技会に参加した航空自衛隊員の訓練を指導し第1位のトロフィー獲得に導く等、航空自衛隊と米空軍との友好親善及び相互理解の増進に献身的に尽力 He has especially contributed to the deployment of the Koku-Jieitai units to Exercise RED FLAG Alaska. He supported the Koku-Jieitai personnel to accomplish the safe wreckage movement for a Koku-Jieitai's F-35A. In addition, he trained the Koku-Jieitai team who participated in the 2021 multinational Port Dawg Rodeo event and guided the team to win the first place trophy at the competition. All his dedication contributed to the significant advancement of friendship and mutual understanding between Koku-Jieitai and USAF.
	SSgt Tristan N. Caro 3等軍曹 トリスタン N. カロ	
U S A F 第374空輸航空団 (横田) Yokota		「キーン・エッジ2020」や「コープ・ノース2021」において航空自衛隊と米空軍の間の言葉の壁を埋め演習の円滑な実施に大きく貢献した。また、ボランティアとして航空自衛隊の英語クラスを教えるなど航空自衛隊と米空軍との友好親善及び相互理解の増進に献身的に尽力した。さらにメディカルリエゾンとして、「東京救急医療サミット2021」において東京救急医療チームと航空自衛隊医療チームとのパートナーシップの強化に努め、航空自衛隊入間病院の開設を支援する等医療分野における日米相互協力に多大なる貢献 She has bridged the language barrier between Koku-Jieitai and USAF during Keen Edge 2020 and Cope North 2021 with her high proficiency in Japanese and has greatly contributed to the smooth implementation of bilateral exercises. Additionally, she taught English at the Koku-Jieitai English classes as a volunteer. She has achieved great results by devoting herself and her time to promoting the friendship and mutual understanding between Koku-Jieitai and USAF.
	Capt Emiko Perkins 大尉 エミコ パーキンス	
第18作戦群 (嘉手納) Kadena		米空軍と航空自衛隊との共同訓練に際し、日米相互運用性に大きく寄与するとともに、特に、地域における共同訓練において堪能な語学力と経験を活かし通訳や空中給油機教官操縦者として活躍 His remarkable efforts include showing his outstanding language skills through interpreting and conducting local joint training as a tanker instructor pilot during various bilateral exercises.
	Maj Logan Barlow 少佐 ローガン バーロー	

令和3年度 JAAGA 嘉手納基地等研修

JAAGA members' Visit to KADENA AB on 15 and 16 March 2022



Group photo of JAAGA Study Tour Members with Lt Gen Yajima and Maj Gen Takaishi

【全般】3月15日（火）及び16日（水）の2日間、JAAGA 会員による米軍嘉手納基地及び航空自衛隊那覇基地の研修を実施し、それぞれの任務及び主要装備品等についての理解を深めるとともに、日米指揮官等との懇談等を通じて日米安全保障体制の重要性を再認識し、友好親善を図った。

研修団は、団長として大串康夫氏（正会員）、副団長として加藤美重子氏（個人賛助会員）と鈴大八氏（団体賛助会員）を迎え、研修員として正会員4名、賛助会員22名（法人4名、団体4名、個人14名）及び同行理事として5名（平本、吉田、今瀬、大岩及び池田）の総勢31名が参加した。

本研修の計画から実施において、ウクライナ情勢や新型コロナ禍にあっても日米関係部隊からの誠意あふれるご支援をいただいて受け入れていただき、多大なる成果を得て日米相互理解と信頼の絆を強くすることができた。

【研修第1日目】

<結団式>

研修団は、早朝に入間基地に集合し基地空輸ターミナル2階において結団式を行った。団長及び副団長からそれぞれ研修にあたっての意気込みや心構え等を含めた挨拶を頂き、引き続き参加者全員の自己紹介が行われた。また、出迎え・見送りいただいた中部航空方面隊司令官小笠原卓人空将と中部航空警戒管制団司令兼ねて入間基地司



Organizing ceremony of JAAGA Study Tour



Tour Leader Okushi with Lt Gen Ogasawara, Commander of Central Air Defence Force and Maj Gen Tsumagari, Commander of Iruma AB

令津曲明一空将補（当時）からも研修団歓迎のお言葉を頂き、これから2日間研修するにあたって、和やかに打ち解けて団結を図ることができた。

<空自 C-130H 輸送機搭乗 那覇基地へ>

当初、空は曇天で視程が悪く航空機運航も危ぶまれたが、出発の頃には晴れ間ものぞき始め、研修団は無事に C-130H に搭乗して空路を那覇基地に向かった。雲の上に出ると気流は安定して機内では快適に過ごすことができ、雲の隙間からは遙か下にある富士山を機窓から望むことができた。また、希望者にはコックピット見学を



Fly into Okinawa by Koku-Jieitai C-130H



Mt FUJI through broken clouds (Left)

Cockpit tour (Right)

施していただいた。C-130H 輸送機研修は十分な内容を実施することができた。

<部隊食体験喫食・南西航空方面隊司令官講話>

那覇基地に到着した研修団は、早速基地食堂において隊員と同じ部隊食の喫食体験をした。その後、団長、副団長及び同行理事は、第9航空団司令兼ねて那覇基地司令高石景太郎空将補も同席されて、南西空方面隊司令官谷嶋正仁空将に表敬訪問をした。



Tour members eat the same meal as Koku-Jieitai personnel

冒頭、団長から新型コロナ対策環境下において、最大限の歓迎を受けたことに感謝の意が述べられ、司令官からは研修団歓迎のお言葉と那覇基地の近況等について話があった。



Courtesy call on Lt Gen Yajima, Commander of Southwestern Air Defense Force and Maj Gen Takaishi, Commander of 9th WG at Naha AB

鈴副団長からはセスナ機を操縦して種子島から沖縄に飛来した時の武勇伝等が披露され和やかな表敬となった。

次に研修団は基地講堂に移動し、谷嶋司令官の講話が実施された。講話内容は、南西航空方面隊の概要として、編成、担任防衛



Lt Gen Yajima presents a brief "Outline of Southwestern Air Defense Force"

区域、対領空侵犯措置の現状、周辺海空域での中国軍の活動、3自衛隊の部隊配置、米軍との協力活動の状況等が解説された。谷嶋司令官の幅広い視点からの貴重なお話をいただき、最前線基地の緊張感やコロナ禍の中で奮闘する隊員の活躍を知ることができた。続いて高石基地司令から那覇基地の概要が説明され、那覇基地の沿革や所在部隊について理解を深めることがで

きた。

< JAAGA 表彰・米軍第 18 航空団概況説明 >

研修団は、9 空団のバスに乗って那覇基地を出発し、次の研修地である米軍嘉手納基地に向かった。円滑にメインゲートを通して米軍第 18 航空団司令部庁舎に到着すると第 18 航空団司令官デービッド エグリン 准将 (Brig Gen David S. Eaglin, Commander, 18th Wing) 直々にお出迎えいただき、その足で研修団と共に国旗掲揚セッションに移動した。当初の計画にはなかったが、エグリン司令官の計らいで研修団列席の下での「JAAGA 表彰式」が執り行われ、日米空軍の関係強化に貢献したローガン バーロー少佐 (Maj Logan Barlow) に表彰状が渡された。引き続きエグリン司令官から研修団に対してのスピーチが行われ、歓迎のお言葉を頂いた。



The JAAGA award ceremony is held in front of JAAGA tour members

その後、18 空団のバスに乗り換えブリーフィング会場に移動した。18 空団広報局長レイモンド ジェフリー中佐 (Lt Col Raymond Geoffroy) により、18 空団の概況説明がなされた。その際、通訳により日



↑ Lt Col Geoffroy presents a brief "Outline of Kadena AB" Well understand of the importance of ↓ Kadena AB and various efforts with interpretation in Japanese

本語で説明がなされたので、研修団は嘉手納基地の特性、最近の任務状況、地域との交流活動等について良く理解することができた。

特に 18 空団は、嘉手納基地が地域の「良き隣人」であることの重要性を認識し、地元との関係を重視していることが良く分かった。

概況説明終了後、宿泊所「SHOGUN INN」に移動



してチェックインを済ませ、夕食懇親会までのひと時をゆっくり過ごした。

< JAAGA 主催懇親会 >

夕刻、嘉手納基地「The Officer's Club」において、エグリン 18 空団司令官以下主要幹部等を招待し、JAAGA 主催懇親会を開催した。



Emcees are Mr Yoshida and SSgt Raughton

まずは全員「カクテル・タイム」で喉を潤し、ウォーミングアップができた頃に 18 空団広報局ベンジャミン ロートン 3 等軍曹 (Staff Sgt Benjamin Raughton, 18th Public Affairs) と JAAGA 吉田浩介理事の司会で懇親会が進められた。

冒頭、エグリン司令官はじめとした嘉手納基地からの招待者 7 名が紹介され、盛大な拍手で歓迎された。続いて、JAAGA の概要と活動内容に関して簡単に紹介された後、JAAGA 研修団の大串団長、加藤、鈴木副団長及び丸野 JAAGA 沖縄支部長の紹介が行われ、同じく盛大な拍手で歓迎された。



Remarks by Lt Gen (Ret) Okushi, JAAGA Tour Leader

大串団長が主催者側として挨拶し、ロシアのウクライナ侵攻に伴う米軍等の即応体制維持の状況及び新型コロナウイルス禍対応の

繊細な状況の中で本研修を受け入れていただいたことに感謝の意が示され、日本周辺情勢から日米防衛協力の重要性が高い中で嘉手納基地における米空軍のプレゼンスが高いこと、厳しい安全保障環境と母国を離れての職務精励とご尽力に敬意を表すること、今回の訪問が日米両国の友情と相互信頼を高めるよう願うことが述べられた。



Remarks by Brig Gen Eaglin

引き続き行われたエグリン司令官の挨拶では、JAAGA 研修団に対する歓迎の意とコロナ禍で久し

ぶりに顔を合わせた高揚感と日頃の JAAGA の支援活動への感謝の意が表され、現状における日米同盟の重要性に対する理解促進への更なる協力と敵対勢力に理不尽な侵略が可能であるかのような考えを持たせないよう協力を呼びかけ、最後に日米両国の架け橋である JAAGA の友人の力を私は確信していると結んだ。

そして、夕食のすべての準備が整ったところで和やかな雰囲気の中でビュッフェ・スタイルのディナーが始まった。新型コロナウイルスの



↑ Fun chatting with a buffet style meal ↓ Fun reception full of smiles at every table

対策上、テーブルでは密に接近して談笑はできなかったが、各テーブルには日本語通訳が配置され、米軍将校等との交流がより密接にできたものと感じた。そのような談笑により和やかに相互の理解を深めたところで、スペシャルゲストとして「宮里加代子琉舞研究所」



An elegant Okinawan dance performance

の舞踊メンバーが登場し、優雅かつ厳かな舞いや時には軽妙な琉球舞踊の舞いが披露された。「宮里加代子琉舞研究所」は、近年は新型コロナウイルスの状況からしばらく演舞披露ができなかったが、以前は沖縄県主催の「大琉球・まつり王国」への出演や昨年アメリカ・テキサスで開催された「JAPAN FESTIVAL」への参加など幅広く活躍しており、その優美な舞いは懇親会参加者の目を釘



Closing toast by Mrs Kato, JAAGA Tour Sub Leader

付けにし懇親会が大いに盛り上がった。

懇親会の最後に加藤副団長が挨拶を行い、国民を代表して日頃の“命がけの演習”実施に対する感謝と、研修団として本研修の受け入れに対する感謝の言葉を述べ、そして最後に出席者各位の健康と活躍を祈念して乾杯を実施し、懇親会を締めくくった。

【研修第2日目】

<嘉手納基地研修>

研修団は早朝に集合し、基地クラブハウスでビュッフェ朝食をとった。クラブハウスは高台にあり、朝焼けの絶景が見られるほか、嘉手納基地滑走路を一望に見下ろすことができるので、早朝から次々と離陸する米軍ジェット機の爆音とともに最前線基地の緊張感を味わうことができた。

次に18空団の計画により、「INNOVATION LAB」の研修が行われ、現有装備の各種の改良研究成果についてブ



Getting a briefing on the outline of INNOVATION LAB

リーフィングを受けた。特に航空機がエンジンを止めないで給油ができる装置は、今次のウクライナ関連の航空機運用において使用されたとのことであった。

続いてバスに乗って飛行場地区を見学しながら巡り、嘉手納基地の広大さを実感しつつ、航空機見学(HH-60G、KC-135、F-15C)が実施された。

HH-60Gの見学では、有事救難における航空機運用の解説がなされ、日米共同救難訓練等によって航空自衛隊救難隊の能力は高いと認識しているとの説明を受けた。KC-135の見学では、航空機の性能全般が説明され、十数時間にも及ぶ長時間飛行になることが多いが重要なミッションなので自覚をもって完遂している



A group photo in front of KC-135 and HH-60G

との解説があった。また、給油ブームの操作室で横たわって給油する模擬体験をした。続いて数十機は並ぶ掩体地区においてF-15C戦闘機の研修が行われ、エグリン司令官自ら航空機説明を実施し、コックピット搭乗体験では一人一人の傍らで計器等の説明等をされ、記念撮影にも



Brig Gen Eaglin explains the F-15C cockpit

快く応じていただいた。季節外れの夏日の炎天下で希望者が30名ほどいたので、その多大なるご支援に感謝しきれない思いである。

最後に、研修団はエグリン司令官及び18空団のスタッフの皆様に見送られ、興奮冷めやらぬうちに嘉手納基地研修を終え那覇基地に向かった。

<第9航空団F-15J/DJ近代化改修機見学>

那覇基地到着後、基地食堂において昼食を頂き、F-15J/DJの見学に向かった。9空団飛行群司令稲留智1佐及び第304飛行隊長高木亮1佐からF-15J近代化改修機の概要説明を受け、これまでのF-15Jの戦闘能力に加え、近代化改修によってネットワーク戦闘の能力やミサイルの能力が格段に向上していること等が解説された。コックピット搭乗体験においては各計器スイッチ類の説明を丁寧に受け、充実した航空機研修をすることができた。

<解団式>

全ての研修メニューを終え、C-130H輸送機に搭乗して空路入間基地に帰投し、空輸ターミナル2階において解団式を行った。まず、各副団長からは、日米空軍間におけるJAAGAの意義を実感し、多忙な中での心遣いに感謝したい旨の感想や実際に見て感動、苦労が分かって感謝という感想が述べられた。

団長からは、今回の研修団の規律ある行動で、研修が滞りなく実施できたことに感謝する旨が述べられ、企画してくれたJAAGAに皆の拍手で感謝したいと音頭を取られ、満場の拍手が巻き起こった。

解団式後の研修参加者の朗らかな表情や和やかな会話から、本研修が参加者にとって非常に充実した内容であったことが伺われた。

(池田理事記)

研修所感 法人賛助会員 丸紅エアロスペース株式会社名古屋支店
若林 誠

今回初めて JAAGA 研修に参加させていただきました。日頃の業務にて航空自衛隊基地に訪問する機会はありませんでしたが、入間基地、那覇基地並びに米軍嘉手納基地は初めての機会であり非常に貴重な経験をさせて頂きました。その中でも印象に残っている事を3点あげさせていただきます。

1 点目は航空自衛隊機並びに米軍機と間近で接した事です。特に航空自衛隊と米軍の F-15 を同日に見学できた事は格別の経験となりました。他にも米軍保有の空中給油機 KC-135 の機内見学、航空自衛隊の C-130 での入間基地から那覇基地までの移動など普段はアクセスできない様な経験をさせていただきました。

2 点目は日米間の協力体制が非常に強固であると実感できた事です。南西航空方面隊司令官の谷嶋空将並びに第 18 航空団司令官エグリン准将からの講話にてアジア太平洋地域での安全保障協力体制はもちろんの事、災害派遣や地域住民に向けたサポートなど様々な

場面で関係性が構築されている事を学びました。

3 点目は航空自衛隊員並びに米軍の方々から温かいおもてなしを頂いた事です。嘉手納基地での懇親会では階級に関係なくフレンドリーな雰囲気でお話を楽しむ事ができました。また実機見学の際に F-15 の質問をさせていただきましたが非常に丁寧な受け答えを頂き、感銘を受けました。微力では御座いますが日本の防衛を担う一人として今回の研修で得た知見を業務に還元していきたいと考えております。

最後になりますがコロナ禍並びに不安定な世界情勢の中、今回の嘉手納基地研修の実現に向けてご尽力を頂きました関係各所の皆様に心より感謝申し上げます。



研修所感 法人賛助会員 日本飛行機株式会社
長岡 遼

JAAGA が主催する那覇・嘉手納基地研修に参加し、大変貴重な経験をすることができた。このような研修に参加するのは初めてだったので、非常に楽しみにしていた。実際の研修では、期待していた以上の様々な経験をさせていただいた。

初日は入間基地から C-130 に搭乗し、那覇基地へと向かった。弊社では C-130 の整備事業をしているが、実際に搭乗するのは初めてだったので興奮した。到着後は、南西航空方面隊司令官より我が国を取り巻く情勢・脅威、南西航空方面隊の役割について講話していただいた。実際に毎日領空侵犯等に対応していただいている方々から話を聞くことができ、とても貴重な機会であった。このような方々のおかげで私たちの日々が守られていると改めて実感することができた。

その後、嘉手納基地に移動し、ジェフリー中佐から日米共同訓練・第 18 航空団の活動について説明を受けた。嘉手納基地の戦略的重要性に加え、日米共同訓練の実態を学ぶことができた。また、第 18 航空団が沖縄住民の理解を得るために様々な努力をしていることがわかった。個人的には嘉手納基地の大きさに驚いた。夕食ではエグリン司令官も参加され交流を深めることができた。普段このような方たちと交流する機会はないので、とても有意義な時間を過ごせた。東日本大震災が在日米軍にとっても、重大な出来事だったという

ことが印象深かった。

2 日目は米軍・自衛隊双方の飛行場見学をした。実際に間近で見る航空機は迫力があつた。特に何十機も並んだ F-15

は第 18 航空団の実力を垣間見た気がした。また、米軍・空自双方で F-15 を見学することができた。お互いの機体を見比べることができたのは興味深かった。

この研修を通じて一番印象に残ったことは、日米双方の方々が非常に気を使ってくくださったことである。私たちの研修が充実したものになるように様々な対応をしていただいた。特にウクライナ侵攻・中露の動きの活発化といった厳しい情勢の中で、研修を受け入れていただいたことは非常にありがたかった。

普段では体験できないことをさせていただいた本研修のおかげで、日米同盟の重要性、自衛隊・在日米軍への理解を深めることができたのは非常に良かった。防衛産業に携わる身として、学ぶことが多く大変充実した研修だった。



米空軍士官学校留学生支援「日光研修」

JAAGA supports USAF Cadet's Nikko Tour on 4-5 December

防衛大学校では、アメリカ・オーストラリア・大韓民国・シンガポール・タイ及びフランス等の各士官候補生が毎年、数週間又は4ヶ月間の研修に来ており、米空軍士官学校については2007年から交流が行われている。昨年度はコロナ禍により中止された



Group photo of Cadets from USAF at National Defense Academy of Japan Opening Festival

が、本年度は米陸軍から1名、米海軍から3名、米空軍から3名、フランス空軍から1名、計8名の士官候補生が派遣されてきた。

本年度はコロナ禍により実施の決定が開始ぎりぎりまでずれ込み、ホストファミリー募集が7月初旬となった。そのためホストファミリーの募集期間が極めて短くなった。

JAAGAから小職が応募するとともに、ご夫妻で元空自幹部である肥田木夫妻に依頼し、前回に引き続き3名で留学生支援を行った。



Group photo of Cadets and their host family members, JAAGA Director Yoshida (left), Mr & Mrs Hidaki (Right)

留学生は計画通り8月24日に入国したが、8月末、防大においてコロナの集団感染が発生したため、ホストファミリーの委嘱式及び学生との対面式は行われなかった。

防大におけるコロナ感染が落ち着き、首都圏に発出されていた緊急事態宣言が解除された昨年10月末に学生に課されていた行動規制が緩和され、ホストファミリーの委嘱式が11月1日に行われた。来日から2か月後にして、やっと留学生とホストファミリーが対面し、交流・支援が開始されることになった。

JAAGAの事業である日本文化研修支援について、日光研修を企画、運営いただいているJAAGA個人賛助会員高柳様の長女、堀川様に本年度の研修実施につ

いて打診したところ、快諾していただき、卒業直前の週末となる12月4日～5日に、これまでと同様に海星女子学院高校の支援を受けつつ、日光方面の研修を行うこととなった。



Heartwarming Group photo at a home party held by JAAGA Director Yoshida

12月4日、留学生と東京駅で待ち合わせし、東京駅再建の歴史と耐震技術について概要を説明し、その後、東北新幹線で宇都宮へ移動した。留学生は最新の耐震技術が適用された東京駅の素晴らしさと初めて乗車する東北新幹線に感激していた。

宇都宮駅では、堀川夫人、海星女子学院高校の佐藤先生及びエスコート役を務めてくれる学生3名の歓迎を受けた。堀川様が経営され



↑ Group photo at road approaching Shrine
← In Nikko Toshogu Shrine
↓ At the nameplate monument of Nikko Toshogu Shrine

る会社から提供された観光バスに乗り込み、日光東照宮へ向かった。日光開山の祖である勝道上人像から参道を上り、輪王寺を参拝。その後、絢爛豪華で、かつ荘厳な日光東照宮へ入った。祈祷殿では結婚式が行われており、神式の結婚式



に留学生のみならず高校生も見入っていた。平成の大修理を終えた陽明門、徳川家康公の墓所である奥宮宝塔、鳴き籠で有名な薬師堂（本地堂）を見学し、第三代将軍徳川家光公の廟所である大猷院及び日光二荒山神社へ向かったが、観覧時間を過ぎており見学することはできなかった。日光二荒山神社駐車場に先回りしていたバスに乗り込み、宿泊先である宇都宮市内の東急ホテルへ向かった。

その日の夜、ホテル内の中華レストラン「竹園」にて堀川夫妻が主催する夕食会が催された。海星女子学院高校の石塚教頭先生、佐藤教諭が参加された。



Dinner in the Chinese restaurant arranged by Mr & Mrs Horikawa

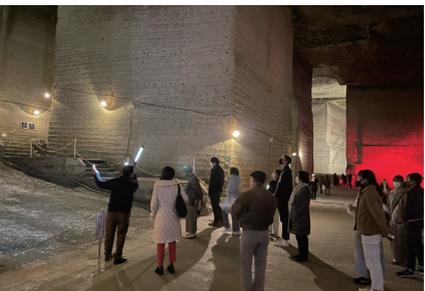
JAAGA 個人賛助会員である高柳様は高齢のため、高柳令夫人は白内障手術後間もないことから大事を取って参加されなかった。堀川夫妻が米国で操縦資格を取得され、米国内各地を飛行機で飛び回った話、米空軍士官候補生と防大生との比較論などで有意義なひと時となった。

翌日は前日と同様に観光バスで、先ず大谷石で有名な大谷地区を訪問した。訪れた大谷資料館では、戦時中は中島飛行機地下軍需工場であり、四式戦（疾風）の発動機を製造していたとの説明に驚きを隠せなかった様子であった。その後、大谷観音堂を訪れ、日本最古の石仏である大谷磨崖仏、宝物館では展示されている本物の一万年前のミ



↑ Receive an explanation of Oya History at Oya Museum

↓ Huge space inside Oya Museum



イラの前では一同、立ち竦んでいた。

道の駅にて昼食を取り、「若竹の杜（若山農場）」を訪れた。ハワイ在住経験のあるガイドさんから、流ちょうな英語で真竹、孟宗竹、亀甲竹など各種の竹の説明を受けるとともに、農園でとれた栗を使った和菓子と竹で製作した器で抹茶をたててもらった。また、栗林で



In the bamboo forest at Wakatake-no-Mori

は毬栗に初めて接するようで、手に取ったり、頭に載せたり、子供のようにはしゃいでいた。

再び観光バスで宇都宮駅まで移動し、ここで堀川様及び佐藤教諭、エスコート役を務めてくれた学生と別れ、留学生たちは東京駅を經由して防大へ戻っていった。

コロナ禍により様々なイベントやプログラムが中止され、同時に新たな生活様式に応じた非対面の取り組みが試みられましたが、非対面での取り組みには限界があり、特に諸外国との交流プログラムについては実体験、対面によるコミュニケーションによってのみ得ることができるものと改めて痛感した。

今年の留学生達は、コロナ禍により自由に外出できる機会が限られていた。また毎年、留学生を案内している入間基地航空祭も中止となり、航空自衛隊の基地を訪れ、隊員と接する機会を持つこともできなかった。しかしながら、限定された機会に鎌倉の神社仏閣研修、東京ウォーク（いわゆる、靖国行軍）、硫黄島研修、そして日光研修などを通じて、日本文化に触れ、多くのことを肌で感じ取ってくれたと思う。

そして近い将来、米空軍において、あるいは米国社会において良き日本の理解者として重要な役割を果たしてくれると確信している。また、留学生のエスコートを務めてくれた海星女子学院高校の学生さん達も、この経験を通じて米国や米空軍にこれまで以上に関心を持ち、日本と米国の橋渡し役を務めてくれると願うと同時に今後も様々な形で応援したいと思う。

（吉田理事記）

スペシャルオリンピックス支援 JAAGA supports Special Olympics in Misawa AB



The ceremony starts with lead up to torch-lighting relay for the games to begin

4月2日、米空軍三沢基地において第35戦闘航空団主催による知的障害がある人のための大会「スペシャルオリンピックス」が2年半ぶりに開催された。

参加者は、三沢基地周辺の東北地方の団体や中学校などで、競技やパフォーマンスが行われた。久しぶりの開催とあって、競技者は勿論のこと、関係者も大いに盛り上がり、見ていて清々しい気持ちになった。

日本側からは三沢市長小檜山吉紀氏、第3航空団司令兼三沢基地司令久保田隆裕空将補、日米エアフォース友好協会 (JAAGA) 池添孝史三沢支部長が招待され、開会式は格納庫内でのパレードで始まり、和太鼓のプレゼンテーション、JAAGAからの寄付、ゲームを開始するためのトーチライトリレーが行われた。



Donation and thank you ceremony for sponsorship of JAAGA

開会式の主催者挨拶の中で第35戦闘航空団副司令官ティモシー マーフィー大佐 (Col. Timothy Murphy, Vice commander of 35th Fighter Wing) から「長年にわたり JAAGA から支援を頂き大変感謝している」とのコメントをいただいた。

大会は ボーリング、50メートル走、障害物競走などの競技やダンス、ズンバなどのパフォーマンスが行われ、最後はアスリートへのメダル授与が行われ最高の盛り上がりで終了した。

マーフィー大佐は「優秀なアスリートの一人一人がこの特別な日の準備に一生懸命取り組んだ結果、彼らは最大の能力を発揮することができた」と選手を讃えられた。

(池添三沢支部長記)



Each and every one of these fine athletes have worked hard to prepare for this special day, and they are eager to show their abilities during today's games

(from Misawa Air Base HP)

SPORTEX '21-B

JAAGA holds SPORTEX '21-B, JAPAN-US friendship golf athletic meet on March 21



Tama-Hills welcomes “BILATERAL SUPER SHOTS”



3月21日(月)、JAAGA ゴルフコンペ「SPORTEX '21-B」が多摩ヒルズゴルフコースにおいて開催された。昨年11月の「SPORTEX '21-A」の後、感染力の強い「オミクロン株」により感染者数は正に「桁違い」の爆発的な増加を見せたが、春先には感染者数が減少に転じ、落ち着きを取り戻したことから、前回同様の「ウィズ・コロナ」形式、一同に会する開会式・表彰式等は実施せず「五月雨式プレー進行」といった形で開催された。

例年であれば現役組も参加した賑やかなコンペとなるが、今回は航空事故等の関係で現役組の参加は叶わなかったものの、福江副会長はじめJAAGA側34名、第5空軍司令部幕僚長セトカ大佐(Col Dominic Setka)はじめ米空軍側15名、総勢49名が「密」を回避しつつ、熱気あふれるプレーで花冷えを吹き飛ばし、親睦を深めた。

競技結果は、中司さんが優勝(GRS 97 HDCP 26.4 NET 70.6)、ネパイアルさん(Mr. Andres Nepaial)が準優勝(GRS 75 HDCP 3.6 NET 71.4)、新規入会の上ノ谷さんが第3位(GRS 97 HDCP 25.2 NET 71.8)となり、ベストグロス、JAAGA側は森下さん(GRS 88)、米空軍側はネパイアル(GRS 75)さんであった。

コンペ実現に尽力された理事各位、今回もボランティアとして運営を支えていただいた大岩理事、そして多摩ヒルズゴルフコース関係者の方々に深く感謝を申し上げたい。「ウィズ・コロナ」でのコンペ実施が板に付いてきた感があるが、早くコロナ禍が終息し、ボリューム満点のハンバーガーを頬張りながらゴルフ談義に花を咲かせ、始球式や表彰式で大いに盛り上がるコンペが復活することを切に願う。

(太田理事記)

OUT START

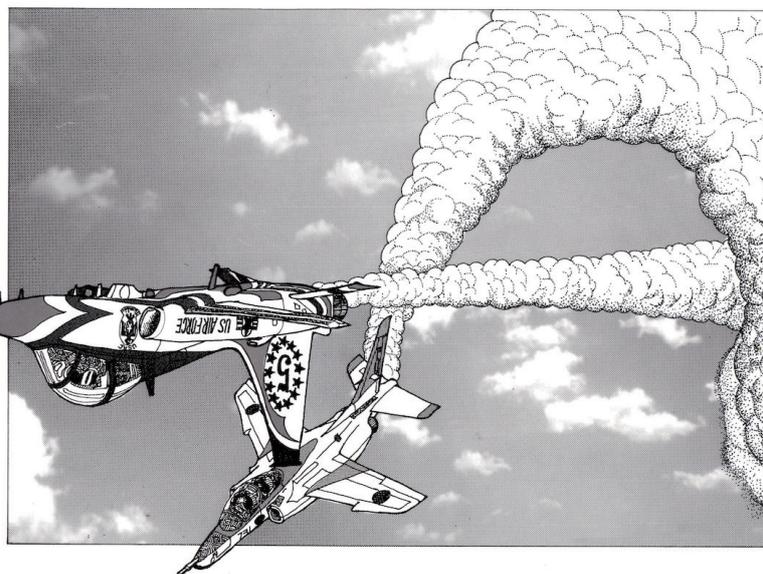
28 Members 7 Parties



IN START

21 Members 6 Parties





JOINT-SCREW T-4"Blue" and T-38 "Thunderbirds"
作：富岡幹博会員

米空軍将校 航空自衛隊勤務だより

Letter from USAF Officer Working in Koku-Jieitai

第1術科学校

1st Technical School

Maj Christopher B. Alfonso



皆さん、はじめまして。アルフォンソ・クリストファー少佐です。現在、静岡県浜松基地の第1術科学校で教官をしています。現配置で3回目の日本勤務となります。日本で勤務できることを幸せに思っています。2019年9月にDLIという米国の外国語大学から浜松へ異動し、2022年の夏には青森県の三沢基地へ異動する予定です。日本での4箇所目の勤務であり、大変楽しみにしています。

簡単に自己紹介をします。家族は、妻と犬1匹で、出身はアメリカのフロリダ州のジャクソンビルです。大学では、テクニカルマネジメントを学び、大学院ではリーダーシップを専攻していました。趣味は家族と過ごすことです。週末には海岸の近くを散歩したり、買い物をしたり、家でテレビやインターネットを見ながらゆっくり過ごしています。

米空軍には18年間勤めており、航空機整備職域で軍用輸送機や爆撃機の整備業務に従事しています。軍に入った当初は、航空機整備員として勤務し、飛行前後に航空機の安全性を検査するとともに、タイヤやブレーキの交換及びオイル補給等の整備を行っていました。その後、ニュージャージー州のマグワイアー空軍基地でC-17とKC-10の整備業務に従事しました。ここで私は規模の大きい整備作業を経験しました。米軍用機は約180日ごとに主要な安全検査を受けます。この検査は、航空機の不具合内容によっては、3～5日かかることがあります。検査は、ハンガーと呼ばれる大きな建物の中でも行われ、すべてのタイヤとブレーキを交換し、そして航空機の損傷を徹底的に検査します。この検査の目的は、航空機が破損する可能性が少なくなるようにすることです。

皆さん、はじめまして。

アルフォンソ・クリストファー少佐です。現在、静岡県浜松基地の第1術科学校で教官をしています。現配置で3回目の日本勤務となります。日本で勤務できることを幸せに思っています。2019年9月にDLIという米国の外国語大学から浜松へ異動し、2022年の夏には青森県の三沢基地へ異動する予定です。日本での4箇所目の勤務であり、大変楽しみにしています。

航空機整備幹部になった後は、活躍の機会が拡大しました。B-1爆撃機の整備計画及び飛行計画の作成に従事するとともに、毎日、基地司令官に航空機の状況の報告を行いました。その他にも、航空機整備員に対する訓練や整備用の工具の管理を行いました。

横田基地で勤務した際は、当基地へ飛来するすべての輸送機に対する整備業務に携わりました。横田基地では年間約1000回のミッションが行われます。私の仕事は、横田基地に着陸した航空機を修理し、航空機に搭乗する人々と貨物が安全に最終目的地に到着できるようにすることでした。オバマ大統領（当時）やトランプ大統領（当時）が日本を含めたアジア諸国を歴訪した際に、大統領専用機に対して整備支援を行ったことはいい思い出です。



Working for Air Force One (Pres Obama) at Yokota with Col Landis

現配置では、航空自衛隊の航空機整備幹部課程の学生に対し、米空軍のことをよく知ってもらえるよう教務を行っています。それだけではなく、日米間の相互理解を深化させるため、浜松基地内のみならず、奈良基地の幹部候補生学校学生に対する講話支援を行ったほか、全国の部隊を訪問しコミュニケーションをとっています。



C-130 Maintenance Tour at Yokota AB with students

航空機の整備はストレスが多いで



Teaching OCS (Officer Candidate School) students at Nara AB

すが、挑戦しがいのある仕事です。労働時間は非常に長く、雨、雪、風、砂漠の暑さなどの気候でも外で仕事をしなければなりません。航空機の整備は止まること



Teaching National Defense Academy Cadets at Hamamatsu

はなく、また、非常に重要な仕事です。航空機を安全にするためには、チーム一丸となり協力しなければなりません。

私が浜松基地で勤務している枠組みである在日米空軍交換将校プログラムは30年以上続いています。理由は米国と日本のお互いの関係を強くさせるためです。在日米空軍交換将校には大きく3つの任務があります。

1. 航空自衛隊を理解する。
2. 自衛官にアメリカと米空軍を理解させる。
3. 地域社会の一員になる（私の妻も参加しています）。

航空自衛隊を理解するために航空自衛隊の教官達の授業に参加し、また、米空軍や自衛隊基地の研修に参加し、積極的に航空自衛隊の文化や歴史などを学ぶようにしています。他にも、毎週2、3回、職場の教官達と一緒に基地外周道路を走るなど、体力練成にも積極的に取り組んでいます。

授業においては、航空自衛隊の整備幹部学生に米空軍の航空機整備の考え方を理解させるために、米空軍の各メジャーコマンド、航空団、部隊、小隊の組織、整備幹部の生活などを紹介しています。授業中に紹介している具体的な例は次のとおりです。

1. 戦闘空軍は米空軍に戦闘航空力を備える。
2. 太平洋空軍は平和、危機及び戦争の時期に航空力と宇宙力を太平洋で支える。
3. 在欧米空軍は3つの大陸に航空作戦の方向付けをする。
4. 特殊作戦空軍は特殊米空軍作戦任務を教導し支える。
5. 教育訓練空軍はエアマンを募り、育てる。
6. 機動空軍は全地球機動任務の航空輸送及び空中給油を支える。

7. 装備空軍は研究、開発、試験及び評価をし、米空軍兵器体系を作戦用のための取得マネージメント・サービス及び後方を支援する。

8. 予備役空軍は予備役として戦闘可能態勢の隊を準備し、軍人が不足する有事の際に、空軍の任務を行う。

最後になりますが、米空軍と航空自衛隊の双方を勤務して私が感じたのは、航空自衛隊の整備は米空軍より Agile Combat Employment : ACE（迅速機敏な戦力展開）能力が高いということです。

これは、航空自衛隊の整備幹部が特技統合により、航空機、武装及び車両器材など、幅広い分野に知見を有することから、人員のアサインが米軍に比して、円滑



↑↓ Agile Combat Employment Training during Cope North 2021



に実施できることが1つの要因になっているからなのではないかと思います。また、曹士の整備員も米空軍の隊員よりも非常に多くの系統の整備を1つの特技で既に実施しています。これは米空軍が現在理想としている Multi Capable Airman（複数のタスクをこなせる隊員）の姿なのではないかと思います。

一方で、航空自衛隊には改善すべき事項があるのではないかと思います。航空自衛隊ではいまだに F-15 をベースとした整備員の教育訓練を実施しています。既に F-35A や KC-46A といった新世代の航空機があるにもかかわらず、このように教育内容が同じであることは変化の対応に遅れていると感じています。また、私は1術校の教官としてほかの自衛官と同じ場所で勤務しているにも関わらず、私が米軍 PC を使用していることで自衛隊の PC とデータの共有ができません。これは業務の非効率をまねく、大きな要因になっていると思います。日米で良好なパートナーであるためにはお互いを信頼し、変化に柔軟に対応していくことが求められていると考えます。

日米同盟のさらなる深化のため、お互い協力していきましょう！

航空自衛隊コーナー

From Koku-Jieitai

トンガ王国における火山噴火及び津波被害に対する国際緊急援助活動

Humanitarian Assistance and Disaster relief supplies to the Damage Caused by Volcanic Eruption and Tsunami Disaster in the Kingdom of Tonga

1月15日に発生したトンガ王国の火山島「フンガトンガ・フンガハアパイ (Hunga Tonga · Hunga Ha'apai)」の火山噴火及びそれに伴う地震と津波は、トンガ王国各島に火山灰を大量に降らして飲み水を汚染し、海岸沿いの村や建物を破壊するなど甚大な被害をもたらした。日本は早期に当該被害状況の情報収集をするとともに、迅速な対応をしたオーストラリア、ニュージーランドに続いて、コロナ禍の困難な状況の中、トンガ王国の災害被害への援助活動を実施した(活動期間1月20日～2月17日)。

航空自衛隊で編成されたトンガ王国国際緊急援助空輸隊は、オーストラリアのアンバレー空軍基地を拠点として大型輸送機C-130H及びC-2により火山灰撤去のための用具等(高压洗浄機、ゴーグル、防塵マスク、手袋)や飲用水・缶詰食料品等の緊急援助物資を合計

約17トン空輸した。また、陸上自衛隊と海上自衛隊の輸送艦「おおすみ」で編成されたトンガ王国国際緊急援助活動統合任務部隊も国際緊急援助活動の一環として約240名の海、陸自隊員と、エアークッション艇2隻やCH-47JA大型輸送ヘリコプター2機を搭載して現地周辺海域に向かい、飲用水や火山灰撤去用具等の

緊急援助物資合計約210トンをトンガ王国へ運んだ。

日本とトンガ王国は1970年以降外交関係を継続しており、日本はトンガ王国にとって先進的技術供与国であって、多額の政府開発援助も継続している。また、日本皇室とトンガ王室の関係も良好であり、日本在住のトンガ王国出身の相撲力士やラグビー選手もいるので日本人にとってトンガ王国は馴染み深い国である。

空自C-130Hがトンガ王国ファアモツ国際空港に到着した際には、「ありがとう日本」と書かれた横断幕が掲げられ、トンガ王国の首相や各省大臣らが日の丸を振って歓迎したとのことからも、両国の友好関係が緊密であることが伺える。この災害を知った日本人は瓦礫等の撤去のみならず、島民の心理

的不安も早期に取り除かれていくことを祈念していることと思う。

国際緊急援助活動終結命令が出された2月17日、岸防衛大臣は臨時記者会見において、「トンガ政府からは、このような自衛隊による支援に対しまして、高い評価と謝意が示されています。(中略)オーストラリアやニュージーランド等の地域のパートナー国との緊密な連携のもと、世界的なコロナ禍が続く中でも、迅速かつ的確な支援を実施できたことは、この地域の平和と安定に対するわが国のコミットメントを行動で示すものとなりました。私にとって、これを最前線で担ってくれた隊員諸君は誇りであります」とコメントされた。

(池田理事記)



C-130H arrives at the Kingdom of Tonga FUA'AMOTU International Airport



C-2 arrives at RAAF Base Amberley



The prime minister and some ministers of the Kingdom of Tonga welcome Koku-Jieitai with a flag saying "Thank you"

寄稿 トンガ王国国際緊急援助空輸隊活動所見

トンガ王国国際緊急援助空輸隊司令

第1輸送航空隊飛行群司令 1等空佐 藤井 浩

この度、トンガ王国国際緊急援助空輸隊司令として、現地における航空輸送の指揮を執りました藤井1佐です。JAAGA だよりへの寄稿という貴重な機会をいただきましたので、トンガ王国国際緊急援助空輸隊の活動所見について述べさせていただきます。

今回の任務は、1月15日にトンガ王国で発生した海底火山噴火に伴う被害に対し、国際緊急援助活動として速やかに空輸隊を編組し、トンガ王国に対する支援物資等を輸送することでした。

1月20日にC-130H輸送機2機をもって日本を出発し、豪空軍アンバレー基地を活動拠点としながら、

4回の空輸を実施し、トンガ王国からニーズのあった飲用水や高圧洗浄機等、計約17トンの物資をトンガ王国に届けることができました。



Handover of relief supplies with careful protection against COVID-19

日本がニュージーランド、オーストラリアに次いで3番目に、域外の国としては初めてトンガに緊急援助物資を届けることができ、最初のC-130Hのトンガ王国到着時には、「ありがとう日本」と書かれた横断幕とともに首相をはじめ主要閣僚、参謀総長の出迎えがありました。トンガ王国はわが国と歴史的にも深いつながりを持った太平洋地域における重要なパートナーであることを再認識した瞬間でした。



Japan sends a sense of friendship along with relief supplies
The crew write a message "TOMODACHI" ("friend") on their backs

世界的な新型コロナウイルスの感染拡大の中、トンガでは物資の荷下ろしの際にも機外には降りず、現地の方との接触をできるだけ避ける方法をとるなど、感染防止には特別な配慮が必要なミッションでした。トンガ王国の1日も早い復興と持続的な発展を願いつつ、我々のメッセージをタイベック・スーツ（防護衣）やラグビーボールにしたため、緊急援助物資を届けました。そして、任務遂行の強い意志と徹底した感染防止策により困難な状況を克服し、無事任務を完遂できたことを指揮官として大変誇りに思っております。

また、今回の任務に関し、豪政府及び豪軍には多大なるご支援をいただきました。豪空軍からの支援に対する感謝を豪統合軍空軍部隊指揮官チャペル准将（Brig Gen Stephen Chappell, Air Commander）に直接伝える機会を得ることができました。（細部は豪国防省HP 2月8日付「Amberley hosts Japan Air Self-Defense Force」参照）



Col Fujii express his gratitude to Brig Gen Chappell for great support



Fly over Tonga, FUA' AMOTU International Airport far below

オーストラリアは「自由で開かれたインド太平洋」の実現に向けて、共に歩む特別な戦略的パートナーであり、今回のような任務を通じて、自衛隊と豪軍の連携を深めていくことが、日豪関係のさらなる深化につながるものと認識しています。

寄稿 トンガ王国における国際緊急援助活動に参加して

第3輸送航空隊 1等空尉 鈴木 侑司

航空自衛隊第3輸送航空隊は、トンガ王国における国際緊急援助活動について、緊急援助物資を可能な限り迅速に現地に供与するため1月22日より本邦からオーストラリアの拠点まで輸送活動を実施しました。

第3輸送航空隊が保有するC-2によって飲用水、火山灰撤去のための用具等（高圧洗浄機、ゴーグル、防塵マスク、作業用手袋）の緊急援助物資を国際緊急援助活動の空輸拠点であるオーストラリアのアンバレー空軍基地まで輸送しました。

私は、C-2の機長として、今回、トンガ国際緊急援助活動に参加する機会を得ました。トンガ王国は、トンガ北部の火山島の噴火により甚大な被害を受けており、迅速かつ的確に緊急援助物資を輸送する必要があります。私は、日の丸を肩に付け、この輸送任務に従事することに大きな責任と強いプレッシャーを感じました。しかし同時に、我々が届ける飲用水1本1本の向こうにトンガ王国の国民の皆様の笑顔があることや、その後の生活の支え及び復興の一助を担えることに、大きなやりがいも感じました。

また、新型コロナウイルスの感染の拡大が懸念される厳しい状況にあり、豪空軍関係者との接触を必要最小限に留めることや、機外の活動時にはタイベック・スーツの着用及びソーシャルディスタンスの確保が必要であったため、出入国手続きや地上支援に係る諸調整において、以前よりも相互の意思疎通が困難な環境にありました。その中でも豪空軍は、我々の話す言葉



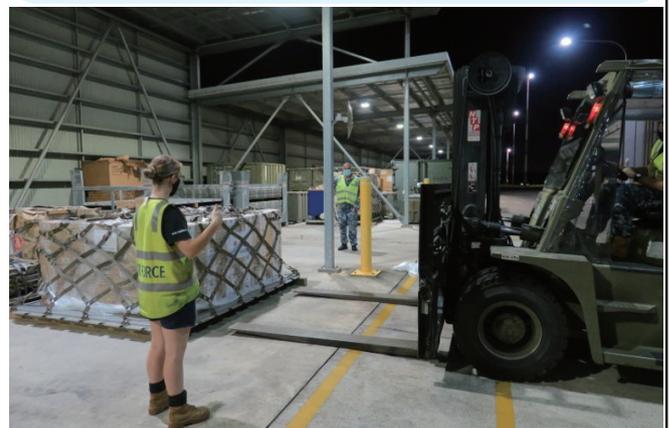
2 C-2, 3rd TAG off departing for RAAF Base Amberley from Miho AB



Capt Yuji Suzuki, 3rd TAG participates in the mission as a C-2 captain



↑ ↓ The support of the Australian Air Force is friendly, polite and sincere



の一語一句や仕草を丁寧に拾い上げ、時間に制約のある状況においても認識の齟齬が生じないように何度も確認を行ってくれました。友好国として自衛隊の活動を支えてくれようとする姿勢に、私は大きな感銘を受けるとともに、日豪のパートナーシップの重要性を強く感じました。

我々の活動は終結しましたが、トンガの復興と持続的な発展を願う日々は続いています。今回の活動を通じて、日々の任務及び練成訓練に励むことが地域や



The kangaroos are also watching the unloading work

世界の平和につながることを強く認識することができました。今後も友好国等と緊密に連携し、あらゆる事態に対応する自衛隊の一翼を担うべく、「迅速かつ確」な航空輸送を追求していく所存です。

米空軍コーナー

From 5th Air Force

今回は第5空軍の記事を2件紹介する。

1件目は、第5空軍が横田基地において開催した「女性、平和、安全保障シンポジウム (Women, Peace and Security Symposium (WPS Symposium))」。このシンポジウムには米空軍だけではなく米軍各軍種に加えて海上保安庁や海上、航空自衛隊からも代表が参加する初めての取り組みで有意義であったとのことである。

2件目は、米第5空軍が軍事専門教育の一環として行った歴史研修についてのFB記事。硫黄島に一日滞在、ハイキングを通じて硫黄島での戦いの歴史を学んだとのことである。(浅井理事記)

「女性、平和、安全保障シンポジウム」 Women, Peace and Security Symposium (WPS Symposium)

<https://www.5af.pacaf.af.mil/News/Article-Display/Article/2980761/fifth-air-force-hosts-women-peace-and-security-symposium/>



Women, Peace and Security Symposium attendees, Female service members from the U.S. and Japan

第5空軍は、3月22日から24日にかけて、横田空軍基地で日本初の軍事分野に焦点を当てたWPS (Women, Peace and Security) シンポジウムを開催した。

シンポジウムには、米空軍、陸軍、海軍、海兵隊、海上保安庁、日本の海上・航空自衛隊の代表が出席した。

第5空軍司令官のリッキー・ラップ中将 (Lt Gen Ricky Rupp, Fifth Air Force commander) は、参加者に1週間を通して奮闘と成功を共有し、WPSの枠組みを強化する各軍種および二国間のつながりを築くことを奨励するメッセージでシンポジウムを開会した。

ラップ中将は「今週、各軍種及び日本のパートナーが一堂に会して、このような重要なトピックについて話し合うことができたことに感謝しています」と述べ、



Lt Gen Ricky Rupp, Fifth Air Force commander, speaks to attendees

更に、「一緒にいる間、皆さんが本当にオープンマインドで、所属する組織の視点でお互いに耳を傾け、私たちのカウンターパートの声を聞いてほしいのです。変化を起こすために短期的にできること、中期的にできること、そして長期的なビジョンは何かを考えましょう。考え方を換え、リーダーに『私たちがより平等な組織になるのを助けてくれるのは誰なのか』と言ってもらえることができます」と述べた。



The panel discuss topics like the importance of work-life balance, overcoming barriers and developing leadership

1週間を通して、WPSシンポジウムは、在日米国大使館、5空軍情報部門、アメリカインド太平洋軍WPS事務所ジェンダーアドバイザー、空軍省女性イニシアチブチームからブリーフィングを受けた。これらのブリーフィングでは、危機と紛争が女性に与える影響、ジェンダーの視点、各軍種及び二国間のイニシアチブ

で協力する方法などと共に他の多くのトピックにも焦点を当てた。

このシンポジウムは日本で初めての開催であったが、参加者と講師は、これが最後ではなく、軍種を超えた継続的な関与が必要であることを確認した。



Female service members from the U.S. and Japan pose for a photo

第5空軍司令部の最先任上級曹長キャサリーン マクール 最上級曹長 (CMSgt Kathleen M.Mcool, the Command Chief Master Sergeant, Fifth AirForce)は、「このシンポジウムが、女性、平和、安全保障に関する我々の各軍種および二国間パートナーとの多くの関与の最初のものとなることを願っています」また「女性は紛争や危機において重要な役割を果たしているため、共に努力することで、障壁を打ち破り、同盟関係を強化するために一緒に前進する能力を向上させることができます」と述べた。

(浅井理事仮訳)

硫黄島の日

Airmen from across Fifth Air Force visit and hike historic Iwo To

<https://ja-jp.facebook.com/fifthairforce/>

第5空軍では、各部署から参加者が、軍事専門教育の一環として、歴史的な硫黄島を訪れる機会を得た。

参加者は島の小道あるいはビーチを横切り、硫黄島の自然を満喫しながら、摺鉢山の頂を目指した。

その途上、講師の説明に耳を傾け、実際の状況をイメージしつつ、顕彰碑 (Reunion of Honor) などに触れることで、硫黄島の戦いの歴史を学び、体験することができた。

そして、先の戦争で命を捧げた人々を称えたのであった。

(浅井理事仮訳)



Airmen learn the history of the Battle of Iwo Jima



Airmen hike across the island's path and beaches to the top of Mount Suribachi



↑ Reunion of Honor

↓ View of Pacific ocean from Iwo To



米空軍の将来動向について（その3）

Future Trends of USAF (Part III)

正会員 荒木 淳一

1 はじめに

本稿は、米空軍の将来動向に関する第三回目であり最終回となる。第一回目、二回目では、米国の防衛計画、戦力設計、予算等に関する有力シンクタンクである戦略予算評価センター（Center for Strategic and Budgetary Assessments: CSBA）の報告書や米空軍の態勢報告等、米空軍の将来動向を探る上で参考になると考えられる文献等を紹介してきた。中国が米国の対等の戦略的競争相手として台頭し、「地経学」的アプローチ／グレーゾーンにおける現状変更の試みを常態化させ、A2ADの脅威や宇宙・サイバーを使った非対称な挑戦が常態化している中、米国は国家安全保障戦略／国家防衛戦略を抜本的に見直した。対中スタンスは「関与」から「戦略的競争」へと大転換し、新たな戦略や作戦構想を模索する努力が続けられている。その根底には、「米国の圧倒的軍事優位性が失われつつある」という強い危機感がある。米海兵隊は「フォースデザイン2030」に基づき機動基地前進作戦（Expeditionary Advanced Base Operations: EABO）に関するマニュアルを作成し、陸自との日米共同訓練での実際の演習を始めている。2020年12月には米海軍・米海兵隊・沿岸警備隊の連名で「海上における優位：統合された全領域海軍力による勝利（Advantage at Sea: Prevailing with Integrated All-Domain Naval Power）」という構想が発表される等、各軍種の新たな戦い方の模索は概ね収斂しつつあるように思われる。

その様な中で、前空軍参謀総長ゴールドフィン大将が提起した「統合全領域作戦（Joint All Domain Operation: JADO）」は、国防省内で各軍種の新たな作戦構想の基盤として位置付けられるとともに、米空軍内においてはこの構想に基づくドクトリンが策定されつつある。

本稿では、米空軍の新たなドクトリン創出の動きとその方向性を3つのドクトリン関連文書を通じて紹介したい。2つのドクトリン・ノート①「統合全領域作戦における米空軍の役割」（AFDN 1-20）と②「迅速な戦闘展開」（AFDN 1-21）並びに米空軍の最も基本的なドクトリンである③「空軍力（The Air Force）」（AFDP 1）における「任務指揮（Mission Command）」を重視する改正について取り上げることとする。これらは、日米共同作戦の実効性を向上させる観点からも極めて重要であり、中台危機への対応を含む日米共同作戦構想の検討や防衛力整備においても十分に考慮されるべきものであろう。我が国においても戦略3文書（国家安全保障戦略、防衛計画の大綱／中期防衛力整備計画）の見直しが行われており、検討結果を受けて今後どのように米空軍の動向を施策に反映するか十分な検討が必要である。また、本稿の執筆中に生じたロシアによるウクライナへの軍事侵略は先行きが見通せない厳しい状況

が続いている。如何なる形で戦闘が終結するかに関わらず、今後、米国が、欧州におけるロシアとインド太平洋における中国という二正面対応を迫られる可能性はより高くなった。その際、同盟国の果たすべき役割に対する米国の期待は今まで以上に高くなっていることに留意が必要である。我が国の防衛力の強化のみならず日米同盟の実効性向上に向けたより一層の努力は待たなしの状況である。米空軍の新たな作戦構想やそのドクトリンの動向を理解し、我が国の防衛力の強化、日米共同の実効性向上に反映させることは、今まで以上に重要になっていると言えよう。

本稿では、2つのドクトリン・ノート並びに基本ドクトリンの主要改正点について、それぞれの概要、特徴並びに空自に対する含意について述べた上で、最後に空自として取り組むべき課題や方向性に関する私見を述べてまとめたい。

2 「統合全領域作戦（JADO）における米空軍の役割」（AFDN 1-20）について

（1）概要

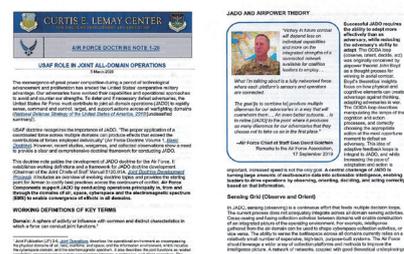
ドクトリン・ノートとは、新たなドクトリンを策定するために、確立されつつある概念に関して主要なポイント、定義等、議論の出発点となる枠組みを提供するものである。本ドクトリン・ノート（AFDN1-20）は、2018年の国家防衛戦略（National Defense Strategy: NDS2018）が米軍に要求する任務、すなわち戦略的競争相手とのハイエンドの戦いを抑止し、必要に応じて打ち破る（勝利する）ことを達成するために、前空軍参謀総長ゴールドフィン大将が2020年3月5日に策定したものである。

AFDN1-20では、JADOや統合全領域指揮・統制（Joint All Domain Command and Control: JADC2）

等の鍵となる用語の定義、何故JADOが必要か、JADOとは如何なるものかについて記述するとともに、航空戦力運用

の理論家であるボイド大佐のOODA（Observe, Orient, Decide, Act）ループによるJADC2の意義に関する理論的説明、更にはJADO実行の前提となる3つの作戦概念、「機敏な支援（Agile Support）」、「全領域の防護（All Domain Protection）」、「強靱な持続性と兵站（Resilient Sustainment and Logistics）」について記述されている。

（2）特徴



ドクトリン・ノート AFDN 1-20

まず第一に、AFDN1-20 は JADO において敵に対する優位性を獲得する鍵を初めて明確化したことである。それは JADC2 の実現であり、全領域のデータを適切に処理・融合・分配するとともに、権限に応じた適切なレベルでの判断・決心をより迅速に行うことによって、統合戦力をより迅速かつ効果的に発揮しようとするものである。常に相手に勝る速度で判断・命令・行動し、予測不可能な行動の多様さによって敵を困惑させ、対応不能状態にしておもうというものである。これまで議論されてきた空海作戦 (Air Sea Battle)、領域横断作戦 (Cross Domain Operation : CDO)、国際公共財へのアクセス・マニューバー (Joint Access Maneuver - Global Commons : JAM-GC) 等の作戦概念は、何をもって作戦の優位性を獲得するかが極めて曖昧であった。

第二に、他軍種の作戦構想が軍種指揮官の視点に基づくものであるのに対して、AFDN1-20 は戦域の戦闘コマンド司令官、つまり統合軍指揮官の立場で書かれていることである。米空軍は「グローバルな警戒 (Global Vigilance)」、 「グローバルな到達 (Global Reach)」、 「グローバルな戦力発揮 (Global Power)」 の機能を担っており、あらゆる地域の作戦に主導的役割を果たす必要があること、統合戦力の火力発揮を調整し最大効果を得るためには、航空戦力運用にかかる指揮・統制機能が最も適していること等がその理由として考えられる。国防省において JADO / JADC2 が各軍種の戦い方を包括する構想として位置付けられたのは、このような航空戦力運用の考え方が統合運用に大きく寄与することが理由の一つと考えられる。

第三に、米空軍が JADC2 を支える先進戦闘管理システム (Advanced Battle Management System : ABMS) の実現に AFDN1-20 策定と並行して取り組んできたことである。ABMS は元々は老朽化した E-3AWACS や E-8Joint Star の後継機事業に替えてゴールドフィン大将が立ち上げたプロジェクトである。戦域における目標情報の収集や融合、配分の機能を抗堪性を持つ網の目状のネットワークで行おうとするもので、プラットフォームからネットワークへの転換として注目を集めた。また ABMS の開発に関するプロセスでは、従来の研究開発プロセスとは異なるアプローチが関心を集めている。情報通信技術に優れたスタートアップ企業との協力や他軍種のウェポン・システムをアプリやソフトで接続し、キル・チェーンを完結する試みを現場実験 (オンランプ実験) として、各戦域の戦闘コマンドの演習として実施している。他方で ABMS は対象とする作戦のレベルや範囲が不明確であったことから、ケンドール空軍長官は着任直後から ABMS に対して批判的であった。しかし、ABMS の運用要求やマイルストーンが明らかになるにつれて批判のトーンは下がっている。ケンドール長官が明示した空軍省として取り組むべき主要命題として、次世代制空戦闘機 (Next Generation Air Dominance: NGAD)、地上配備型核抑止システム (Ground Based Strategic Deterrence : GBSD) 等と並んで、ABMS も位置付けられている。加えて、米空軍には国防省内における JADO/JADC2 を主導する役割も与えられている。他

軍種でも ABMS と類似のプロジェクト、すなわち陸軍の「Project Convergence」、海軍の「Project Overmuch」が進められているが、最終的には ABMS と接続され、JADC2 の一部として機能することが期待されている。

最後に、JADC2 の追求は米空軍が抱える他の課題、すなわち近代化の遅れや戦力規模の縮小等に対する一定の解決策になっているという点である。JADC2 による JADO が実現すると、一軍種の特定のプラットフォームの火力に依存せず、様々な火力を目的、目標に応じて柔軟かつ適時適切に組み合わせることが理論上は可能となる。近代化の遅れたレガシーシステムも、ABMS を通じてネットワーク化されることによって、引き続き能力発揮が可能となる。エッジの効いた最新機能を短期間で開発し ABMS のネットワークに接続することによって、その機能の規模が小さくても全体としての優位性獲得に寄与できる。従来は、様々な機能を一つのプラットフォームに載せようとする際、システム全体としてのバランスを取るため個々の機能の能力を下げざるを得なかったり、バランスを取るための試行錯誤によって開発に長期間を要し、開発費が高騰することもあった。しかし、個別の新たな機能をネットワーク化できれば、機能の最大発揮や開発期間の短縮も可能となる等、近代化の遅れの解消や開発・装備化の費用の低減により、レディネスに及ぼす影響も局限できると考えられる。

(3) 空自に対する含意

ABMS プロジェクトは未だ運用要求を検討している段階であり、装備化、実運用化までには一定の時間が掛かると考えられる。しかし、米軍は既に各軍種間でのネットワーク接続のみならず同盟国等とのネットワーク接続、情報の共有も想定してプロジェクトを推進している。既に構想の段階から同盟国軍の ABMS への関与を求めており、ABMS プロジェクトの定期的な情報共有の場に同盟国が招聘されたり、各国軍との調整を実施する部署も空軍省内に設置されている。また ABMS に関する現場実験では、既に欧州の同盟国空軍のプラットフォームをネットワークに繋いで演習が実施されている等、同盟国との接続も想定内と見られる。

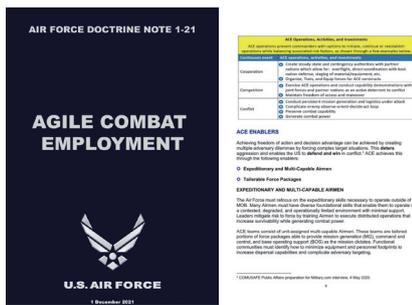
最新の通信技術やクラウドを使ったネットワークの構築、データの共有、融合、配分等に AI や機械学習 (Machine Learning : ML) の技術を適用することにより、指揮・統制機能を迅速化、最適化するのが狙いである。我が国も統合作戦構想を念頭に統合の C2 系統の構築に速やかに着手すべきであり、その中核は JADGE をベースとする空自の C2 系統であると考えられる。少なくとも統合運用の基本的 C2 が確立されていない限り、日米共同の場面において陸海空自衛隊のプラットフォームが個別に米軍のネットワークに加入することを求められてしまう。我が国の統合 C2 を構成した上で米軍のネットワークと接続する場合でも、米軍ネットワーク内におけるデータの処理、融合、共有、配分等に関する考え方や AI 処理の判断基準、アルゴリズム等について熟知した上でネットワークに加入しなければ、日米間の指揮統制権の独立が曖昧になる等、政治的に難しい問題を抱えることとなる。

3 「迅速な戦闘展開 (Agile Combat Employment : ACE)」 (AFDN1-21)

(1) 概要

本ドクトリンノートは、2021年12月1日に現米空軍参謀総長ブラウン大将の署名によって発出されたものである。ACE という用語が何時から使われ始めたかは定かではない。しかし、中国の A2AD の脅威によって航空戦力発揮の前提である航空基地の脆弱性が明らかになるとともに、作戦運用、後方補給の大規模な拠点基地を構える現在の態勢では、航空作戦の遂行が困難と認識されてからであることは間違いない。

本 AFDN1-21 においては、ACE に関連する重要な用語の定義、事態の推移に応じた ACE の実行要領、ACE を実現させるための 2 つの能力促進要因と ACE を構成する 5 つの核となる能力、3 つの重要な要素が示されている。



ドクトリン・ノート AFDN 1-21

ACE の能力促進要因として、第一に「派遣可能で多機能なエアマン (Expeditionary and Multi-Capable Airmen)」、第二に「状況に合わせて構成される戦力パッケージ (Tailorable Force Package)」が挙げられている。脆弱な作戦運用基盤を分散しつつ、従来の大規模拠点における運用と同等量の戦力を提供するためには、敵の攻撃下においても分散された場所で様々な航空機をターンアラウンドし、必要なソーティ数を生み出さなければならない。分散された場所に派遣し得る人員数には限りがあることから、必然的に一人の要員が様々な業務を実施できる多機能の専門性を有していなければならない。また特定の場所でしか特定の航空戦力を運用できないならば、数が少なく高価値のアセットを運用する場所がボトルネックとなり全体としての戦力発揮を左右する可能性がある。したがって、状況に応じて柔軟に航空戦力を組み合わせ、パッケージ化することが ACE の重要な要素となる。

次に、ACE の 5 つの鍵となる機能として、①「態勢 (Posture)」、②「指揮統制 (Command & Control)」、③「展開と機動 (Movement and Maneuver)」、④「防護 (Protection)」、⑤「持続 (Sustainment)」が示されている。

①「態勢」では、敵の威力圏内におけるリスクを低減し、戦域内及び戦域間の展開・機動を状況に応じて柔軟に実施するためには、レディネスの高い態勢が重要であるとしている。また、事態の進展に先んじて同盟国やパートナー国との調整を行うためにも、政府全体として ACE に取り組む必要があると指摘している。

②「指揮・統制 (C2)」においては、先に述べた JADO/JADC2 を前提として、ACE 実行上の C2 の要点を示している。作戦域内において C2 系統に対する攻撃や妨害を受けることは前提であり、被害を受け機能低下した状態でも

作戦継続しなければならない。そのためには、適切な権限の委任と上級指揮官の意図の範囲内で臨機応変に任務を継続することが ACE の鍵となる。

③「展開と機動」では、ACE を実行することによって能動的に敵の判断に働きかける、つまり ACE の機動性、迅速性によって敵の攻撃計画を混乱させるなど、敵を出し抜いて優位性を維持しようとする主体的・能動的な意図が示されている。米空軍は世界規模で戦力を展開しているが、戦域内と各戦域間における迅速な戦力の展開や機動をよりダイナミックに実施することを前提としている。ACE を実行するに当たり、全て米軍の能力だけで自己完結することは考えておらず、民間力の活用によって輸送力の負担を軽減することも必要と考えている。

④「防護」は、航空基地がどこに所在していても、敵の攻撃を免れる「聖域」は存在しないという NDS2018 の問題認識をベースにしている。そのため、積極防御と消極防御を適切に組み合わせた統合ミサイル防衛 (IAMD) 態勢の確立が戦力保全と戦力の最大発揮には不可欠であると強調している。現在の大規模な作戦拠点基地を中心とした防御計画や戦略は ACE の分散運用に不適であり、分散運用を前提として統合戦力を展開させるとともに受け入れ国戦力との組み合わせも事前に計画しておくべきであるとしている。その際、情報機能、対情報機能、緊急事態管理機能、法執行機能等は、空軍単独で準備するのではなく統合の機能として準備するとともに、同盟国等の支援によって補完することも念頭に置くべきとしている。

⑤「持続」では、兵站システムや輸送システムを現在のプル型でジャスト・イン・タイムの効率性重視の兵站システム (現場のニーズに応え必要な時期に必要な量を提供するもの) から、分散運用の最大効果を発揮することを重視したプッシュ型に転換すべきと述べている。敵の攻撃に晒される環境下においても戦力を展開し、防護し、持続するために、兵站インフラを大きく変革させ、戦時品と非戦時品を区別し優先順位を付けて配分する等の新たな取り組みが不可欠としている。特に広い戦域内において運用場所を増やす際、ACE によるソーティ数の確保に焦点が当たりがちであるが、作戦を持続するための後方補給、輸送のための細部計画の策定がより重要であると強調している。このことから、現地でサービス、補給、装備品等を確保するための新たな契約要領の策定などの重要性も指摘している。

5 つの鍵となる要素以外に、ACE にとって重要な 3 つの事項として、①情報戦、②インテリジェンス、③火力、を挙げている。戦力の展開、機動のタイミングや場所、規模等にかかわる明示的な情報は、戦略的メッセージとして抑止や同盟国支援の保証として機能する。また、能動的、受動的に関わらず ACE の計画と実行においては、欺瞞的な情報の活用により敵の混乱や判断ミスを導くことができることも強調されている。同様にインテリジェンス、カウンター・インテリジェンスの活動も ACE の実行に不可欠である。JADO として全ての領域からの火力集中を実現するためにも、ACE の計画、実行の段階において、情報戦、インテリジェンス、火力の観点と任務指揮の活用が重要であ

ると述べている。

(2) 特徴

AFDN1-21 で示された ACE の特徴の第一は、前方展開戦力をベースに戦域外の拠点から航空戦力を投入する従来の航空作戦構想を大きく変えたことである。対等の競争相手である中露とのハイエンドの戦いを想定していること、弾道ミサイルや巡航ミサイル等の A2AD の脅威によって、戦域内のみならず戦域外の作戦拠点の脆弱性が増したことが理由として考えられる。そのため、攻勢主体であった従来の発想から、攻防の両面を重視したバランスを重視する作戦構想となっている。

第二の特徴は、中国の A2AD の脅威に対する対応を検討する過程で、2010 年代半ばごろから急速に発展した概念であるという点である。ACE の起源は、米国の安全保障・国防戦略 (NSS/NDS) が見直された以降、米太平洋空軍との意見交換の場で示されたたった一枚のコンセプト・ペーパー (概念図) であったと仄聞する。その後、ハブとなる航空基地を中心に複数の航空基地を含んだクラスターを構成し、その中で航空戦力を柔軟に運用するという概念に発展したとされる。しかし、空自にとって特段目新しい構想では無かったはずである。何故なら、冷戦期に圧倒的戦力差のある旧ソ連空軍に対して防勢的な航空作戦で対抗しようとしていた空自にとって、作戦基盤である航空基地が攻撃を受けることは必然であった。それを前提とした上で、隠ぺい、掩ぺい等によって作戦基盤の抗堪化を図ると共に、被害復旧を行いつつ複数の飛行場群で粘り強く作戦を継続するという構想を有していたからである。しかし、法的制約によって民間飛行場の運用態勢を事前に整えることが困難であること、作戦基盤の抗堪化への予算措置が続かなかったこと等から、空自の構想は実現の目途が立たないまま現在に至っている。これに対して、米空軍の ACE は既に実際の訓練や演習を重ねており、インド太平洋地域のみならず欧州方面においても中露の A2AD 脅威に対抗する作戦構想として急速に検証、議論が重ねられ、ドクトリン化される一歩手前まで進展してきている。

第三の特徴は、当然と言えば当然であるが、ACE は JADO/JADC2 並びに次項で説明する「任務指揮」の考え方と整合されていることである。中露とのハイエンドの戦いにおいては、敵の攻撃を受け作戦基盤が機能不全に陥ったり、指揮統制系統 (C2 系統) が一部機能を失っても、作戦目的達成のために同調された作戦行動を継続しなければならない。また、ACE は、競争継続 (Competition Continuum) という考え方に則り、平時からグレーゾーン、有事に至るまでのスパンでその活動や対応を捉えている。

(3) 空自に対する含意

第一に ACE は、米統合軍の航空戦力が A2AD の脅威下においても航空戦力の特性を最大限発揮し、ハイエンドの戦いを制するための前提となる作戦構想である。インド太平洋地域という海洋域において ACE を実行するためには様々な工夫と努力が必要であり、また同盟国やパートナー国への期待は大きい。我が国周辺を含む地域内で ACE 実現のための環境を整えることは、わが国の南西諸島防衛の

前提となる要時要域における航空優勢の獲得に寄与するのみならず、米国の対中作戦構想である JADO の成否を左右する米国航空戦力を支援することにもつながることから、戦略的に大きな意義がある。

第二に、米空軍の ACE と空自の飛行場群の運用構想は類似した概念であるが、その考え方や姿勢には違いがある。日米共同作戦の計画・実行に当たっては、その違いに留意することが重要である。空自の飛行場群運用の構想は、敵の第一撃を受け一定の被害が生じる状況下でも粘り強く防空作戦を継続するための、受動的な構想である。これに対して米空軍の ACE は、戦域への出入り、戦域内の機動などにおいて航空戦力の機動力や柔軟性、スピードを発揮して、敵の目標選定に関する判断を混乱させることを企図するなど、能動的な発想に立つ構想である。双方に共通するのは、「展開可能で多機能な能力を有するエアマン」の養成と維持がその構想実現の鍵であることである。既に、米空軍においては実動演習を通じて多機能な能力を付与するための訓練基準や実施要領の検討が具体化しており、米空軍の ACE に対する取組みは空自を追い抜きつつある。JADC2 を支える包括的な指揮・統制システムである ABMS が装備化されるまでの間においても、ACE を実現するための現実的な取り組みが進んでいる。インド太平洋地域における ACE 実現のために統合戦闘ネットワーク (Integrated Warfighting Network : IWN) を 2022 年夏を目途に立ち上げることが米空軍ニュースで報じられている。また、空自の改善提案に相当する制度において、ACE 実現に寄与できる技術や装備に関するアイデアを募った結果、持ち運び可能な太陽光発電の器材によって分散された運用場所において必要な電力と水を一定量確保できる提案が最優秀賞となり、その実装化が見込まれている。

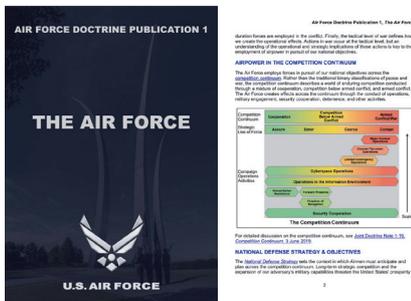
第三に、このような米空軍の具体的な取り組みに対して、空自の飛行場群の運用構想は様々な制約を理由に具体化が遅々として進んでいない。飛行場群の整備が具体的に進まなくとも、今手に入る技術や装備品を使って如何に飛行場群の運用を可能にするかという発想に立って検討を進めることが重要である。民間飛行場をそのまま運用することを前提に持ち運びできる後方補給資器材を整備するなど、できる努力を継続すべきである。ブラダー・タンクの増勢、搭載 Mx 等を運搬・保管可能なコンテナの整備、衛星通信を使って何処でも ATO を受領できる機動型 C2 系統の構築、持ち運び可能な自家発動発電機の増勢、その他飛行場運用に不可欠な資器材のワンパッケージ化等、構想実現のために具体的に検討し実現に向けて予算措置すべき事項は多々ある。また、装備品の取得だけでなく操縦者、整備員、後方補給員を始めとして分散地での運用能力を身に付けるために必要な訓練実施基準の策定や練成訓練の計画、実行も重要である。滑走路被害状況下での運用に不可欠な短距離離着陸訓練を実際に演練したり、離陸後ただちに空中給油を受けて長時間戦闘する訓練を行う等、日頃からの訓練・演習で実施し、経験を積むべき事項は多い。必要であれば運用規則等の見直し、例外規定の設定なども必要であろう。中長期的には、ACE を実現するための鍵として挙げられて

いる持続性 (Sustainment) を担保するために、戦術空輸能力の大幅な強化 (C-130/CH-47 の増勢等) にも取り組むべきであろう。多機能の能力を付与する整備員や特技員の教育・訓練等を含めた要員養成計画の策定、実施など空自全体での組織的な取り組みが不可欠なものも多い。着手しなければ、状況は変わらないことを肝に銘ずべきである。

4 基本ドクトリン (AFDP1) の改正 (作戦指揮 (Mission Command) 関連)

(1) 概要

AFDP 1 「空軍 (The Air Force)」(10 March 2021) は、米空軍のドクトリン体系の最上位に位置づけられるドクトリン文書である。空自の教範体系における「指揮・運用綱要」に相当するものと言うことができるであろう。



基本ドクトリン AFDP 1

AFDP1 には、次に述べるような本質的かつ普遍的内容がまとめられている。①何故戦うのか (戦争とは何か)、②我々は何者か (エアマンとはどういう特性を有する者なのか)、③我々は何を使うのか (エアパワーとは何か)、④どのように発揮するのか (航空戦力の本領)、である。①においては、1) 戦争の特質、2) レベル、3) 競争継続の中での航空戦力、4) 国家防衛戦略と目標、が示されている。②においては、米空軍のエアマンの核となる3つの価値観 (Core Values : Integrity first, Service before self, Excellence in all we do) が示されている。③では、航空戦力の概観、基盤、エアマンが信じる航空戦力の見方、が記述してある。④においては、航空戦力をどう運用するかを示すために、7つの本領が示されている。そのうちの一つが「任務指揮 (Mission Command)」である。AFDP1 が2021年に改正された際、最も注目を集めたのがこの「任務指揮」であった。

(2) 特徴

AFDP1 の特徴の第一は、NDS2018 に示された新しい考え方が盛り込まれている点である。NDS2018 で示された「競争継続」(Competition Continuum) という考え方を受け、統合ドクトリン・ノート (JDN1-19) が策定されている。その中で、協力 (Cooperation)、武力紛争以下の競争 (Competition below armed conflict)、武力紛争 (Armed Conflict) という戦争の全ての段階における航空戦力の使い方が明示されている。

第二に、米空軍を明確に統合軍のための軍種であると位置づけるとともに、統合軍指揮官の目標達成に JADO を通じて寄与することが明示されていることである。我が国においても統合運用の重要性は認識され、統合運用の体制は段階的に整備されてきている。しかし、陸海空の教範やドクトリン関連文書においてここまで徹底して統合運用

の考え方が示されているものはまだ存在していない。更に AFDN1-20 で提示された JADO の考え方がそのまま基本ドクトリン (AFDP1) に反映されている点である。このことは、関連ドクトリンの整合が図られている事実を示すのみならず、米空軍として JADO にコミットする強い意志が感じられる。

第三に、航空戦力の本領の一番目に「任務指揮」が挙げられていることである。以前の AFDP1 で示されていた「一元的指揮・多元的実行 (Centralized Control Decentralized Execution)」は「任務指揮」の実行を説明する項目の中に、「一元的指揮、分散された統制、多元的実行 (Centralized Command, Distributed Control, and Decentralized Execution)」として再定義されている。2021年3月の AFDP1 改正で一番目に付く変化が「任務指揮」の強調であった。NDS2018 で求められる対等の戦略的競争相手とのハイエンドの戦いにおいて勝利するため、JADO の実行に不可欠な本領として示されたものと考えられる。長らく従事してきたテロとの戦いとは異なり、対等の競争相手によって我々の C2 系統が狙われ損害を受けることが前提となる。航空戦力を最大発揮するためには指揮官の意図が徹底され、C2 が一部機能喪失した状況下にあっても委任された権限に基づき現場の柔軟な判断によって作戦を効果的に継続する必要があり、「任務指揮」の考え方を強調したものと考えられる。C2 ネットワークを網の目状に構成したり、常時接続を前提とせず必要な時に接続、離脱を自由に行えるネットワークの確立や、AI や ML を使った情報処理網を検討している。

(3) 空自に対する含意

本稿で紹介した米空軍の取組み、すなわち新たな戦い方を最上位のドクトリン文書に速やかに反映させ、他の関連文書とも整合させるプロセスは、空自も大いに参考にすべきである。空自もドクトリン関連文書の整備を進めてきているところではあるが、教範の体系との整理を含めて課題は多く、タイムリーな修正・変更ができていないのが実情である。昭和47年に制定された「指揮・運用綱要」は、空自の指揮・運用に関わる本質的・普遍的事項が格調高く表現されている。しかし、統合運用の進展、平時における国際平和協力活動等の常態化、ミサイル防衛体制の構築、任務の常態化、グレーゾーン事態に対する常続的警戒・監視の重要性の向上、更には宇宙・サイバー領域の作戦領域化への対応等々、制定後約50年にわたる我が国防衛のあり方に関わる大きな変化が反映されていない。勿論、今でも通用する普遍的かつ重要な考え方も含まれているので、残すべきもの、変えるべきものをしっかりと見極めた上で再整理すべきであろう。その際、教範としての位置付けに拘泥することなく、空自で新たに整備しつつあるドクトリン関連文書への取り込みや他の教範へ分散させた書き込みなど、我が国特有の政治的制約を過度に受け過ぎず、航空戦力の本来あるべき運用の在り方 (戦略的、攻勢的活用等) に関わる議論の触媒となるものにする着意が必要である。現在の教範体系の中で許容される議論だけに限定されてしまうと、航空戦力を扱う軍事組織の一員、軍事専門家とし

て不可欠な姿勢や考え方、指揮運用綱要に「百時防衛行動を基準」として示された作戦運用を第一義とした軍事合理的な発想・考え方が廃れてしまうリスクを内包していることを忘れてはならない。

「任務指揮」という考え方そのものは、作戦の推移が速く他自衛隊に比べてより柔軟な「統制」という考え方を採用する空自にとって馴染みやすい概念である。しかし、その考え方を現在の運用の基本である統合運用に反映させることについても考えるべきである。既存の BMD 網を突破する新たな Mx 脅威への対応やドローン等によるスウォーム攻撃への対応、更には拒否的抑止力として保有する反撃力の運用（ターゲティング、指揮・命令、実行）を含めた統合ミサイル防空システム（IAMD）を確立し実効的に運用するためには、被害状況下においても柔軟に「任務指揮」できる態勢をわが国においても整えておくべきであろう。

5 おわりに

本稿では、米空軍の動向を探る上で重要な手掛かりとなる米空軍の最近のドクトリン関連文書の概要や特徴、空自に対する含意について述べてきた。改めて、取り上げた AFDN1-20、AFDN1-21、AFDP1 について確認する過程で、これらが既に一つのドクトリンとして纏め上げられ、「JADO における空軍省の役割（The Department of Air Force Role in Joint All Domain Operation）」(AFDP3-99 SDP3-99) という米空軍並びに米宇宙軍のドクトリン文書として発出されている事実を確認した。

一読したところ AFDN1-20、AFDN1-21 の考え方はほぼそのまま取り込まれている。「任務指揮」に関しては、JADO の指揮統制（Command & Control）の項目の「計画（Planning）」、「実行（Execution）」、「評価（Assessment）」の中に適切な権限委任を行うべきこととしてしっかり反映されている。今後、更なる内容の精査が必要であるが、その要点と方向性は本稿で紹介したものと大きな違いはない。

国家防衛戦略の転換を受けて新たな戦い方を模索し、その成果を僅か 4 年でドクトリンに昇華させた米空軍の組織としての知的能力の高さには何時ものことながら驚かされる。今後はドクトリンに基づき装備体系、戦力組成、教育・訓練が整合されていくわけであるが、運用主導の発想、実行力が良く現れている。我が国においては、安全保障・防衛に関する独特の政策的制約や縛りが依然として残るのは事実であり、米軍のやり方が必ずしも空自に全て適合するわけではない。しかし、現在、厳しい安全保障環境の下で共通の脅威に直面している状況で、航空戦力を運用する軍事専門家である我々が少なくとも課題に対する姿勢や取り組みで米空軍に後れを取ってはなるまい。以下に、一連のドクトリン文書に関わる動きから筆者が捉えた空自の課題や取り組みに関する私見を述べて、本稿を締めくくりたい。

まず第一に、米空軍の JADO/JADC2 に対する取り組みは、ABMS の実装化を含めて実現に時間が掛かるものがある。しかし、今後も着実に進展し同盟国との共同作戦に関するベースとなることは間違いない。JADO/JADC2 実現

の鍵は、作戦運用に関わるデジタル・データを共有、融合、配分する C2 ネットワークである。陸海空のアセットが個々にネットワーク化されるのではなく、一体化された形で米の C2 ネットワークと接続するためにも、我が国における統合 C2 系統の確立、陸海空アセット間のネットワーク化を最優先すべきであろう。その際、既存のプラットフォームと新たなプラットフォームがソフトやアプリを使って自由に接続、離脱ができたり、民間のクラウドやネットワークも活用するなど、従来の発想に捉われない取り組みが重要である。

第二に、日米共同による ACE の実現は、南西諸島防衛作戦に不可欠であるのみならず、米国航空戦力を戦域内に引き入れ、戦域外に離脱させないための鍵であり、戦略的な意義を有する。従って、米空軍の ACE を十分に理解した上で、柔軟な発想を参考に、長年積み上げてきた空自の飛行場群の運用構想を更新すべきである。その際、法的な制約や予算上の観点から思考停止に陥ることなく、必要となるツール、アセットを具体的に検討し、準備を進めることが重要である。既存の民間飛行場の使用を前提とした訓練を実施するための環境を整えるとともに、多機能で多様な能力を有する要員の養成・維持に関する具体的な養成基準、計画を策定し、速やかに実行に移すべきであろう。

最後に、新たな戦略をベースに新たな作戦構想を作り上げ、それをドクトリン化するとともに必要な装備品等を整備し、所要の訓練を行うという米空軍の運用構想主導のプロセスを参考とすべきである。我が国と米国では条件が異なるものの、常に国家防衛戦略は如何にあるべきか、そこに示された目標を達成するために如何なる作戦を実施すべきか、そのために必要な装備品は何か、如何なる人材を育成・維持すべきか等を検討し、実行可能な選択肢を常に準備しておくことは軍事専門家の責務であり、存在意義でもある。「指揮・運用綱要」の見直しやドクトリン関連文書と教範体系との関係整理なども、速やかに進められるべきであろう。そのような地道な活動によってのみ、予測困難な国際情勢の中で我が国防衛を全うするための政策策定に寄与し、最終的に我が国防衛の責務を果たし得るのである。

脚注 -----

- 1 「統合全領域作戦における米空軍の役割（USAF Roles in Joint All-Domain Operations(JADO))」 Air Force Doctrine Note 1-20 (5 March 2020)
- 2 「迅速な戦闘展開（Agile Combat Employment(ACE))」 Air Force Doctrine Note 1-21(1 December 2021)
- 3 「空軍力（The Air Force）」(Air Force Doctrine Publication (AFDP) 1) (10 March 2021)
- 4 Chairman of the Joint Chief of Staff Manual 5120.01A, Joint Doctrine Development Process
- 5 Joint Doctrine Note 1-19 ” “Competition Continuum” , (3 June 2019)
- 6 The Department of Air Force Role in Joint All Domain Operation (AFDP3-99, SDP3-99) (19 November 2021)

杉山会長 ラップ中将表敬

JAAGA president Sugiyama makes a courtesy call on Lt Gen Rupp



JAAGA President Sugiyama shakes hands with Lt Gen Rupp, Commander of U.S. Forces Japan and Fifth Air Force

5月19日、JAAGA 杉山会長と前原副理事長は、在日米軍兼第5空軍司令官ラップ中将 (Lt Gen Ricky N. Rupp, Commander of U.S. Forces Japan and Fifth Air Force) を表敬訪問した。

ラップ司令官は昨年8月に就任されたが、このコロナ禍において杉山会長の表敬訪問はこれまで実現されず初めて今回実現した。

話題は、台湾情勢、ウクライナ情勢、新防衛戦略等

に及び、いずれにしても日米関係をより強化していく必要があるという認識で一致した。

ラップ司令官は、特に、ロシアのウクライナ侵攻に関しては、発生場所はここから遠く離れているが、太平洋地域と無関係では無くなっており、世界が縮んでいるとの認識を示された。また、そういった意味で山崎統幕長が即座にヨーロッパに出張し「NATO CHOD (参謀長)」会議に初参加した意義は極めて大きいと仰った。

そして、司令官は就任以降、在日米軍部隊を視察してきたが、今後は、空自部隊を空自指揮官とともに回りたいとの意向を示され、日米関係の強化に積極的な一面を覗かせたものと思料する。



(from left) President Sugiyama, Lt Gen Rupp and Vice Chairman Maehara

(前原副理事長記)

米空軍横田基地の行事に参加

JAAGA members participate in social events in Yokota AB

第5空軍ホリデーコンサート

在日米軍司令部・第5空軍合同のクリスマス・レセプションが、12月4日(土)、横田基地オフィサーズクラブで行われた。小田原外務副大臣、地元関係者と共に、自衛隊から山崎統合幕僚長、井筒航空幕僚長、西谷補給本部長、亀岡航空総隊司令部幕僚長及び伊豆原横田基地司令のほか、空幕部長等をはじめ多数の高級幹部が参加された。

JAAGAからは谷井副会長、岩本、藤田各渉外理事のほか、岩崎顧問、前原副理事長が、それぞれ元統合幕

僚長、元航空総隊司令官として招待を受けて参加された。

ラップ在日米軍司令官兼第5空軍司令官 (Lt Gen Rickey N. Rupp, Commander of U.S. Forces Japan and Fifth Air Force) 夫妻が各招待者をお出迎えになりご挨拶の後、オープニングスピーチで「ここにご来場の日本の皆様には、基地内外において在日米軍・5空軍へのご支援を頂き心から感謝しています。米軍人は、本国の家族や親族等と離れて世界各国に展開しておりますが、日本においては皆様の厚いご支援のおかげで任務に邁進できていると確信しておりま



Group photo with Lt Gen Rupp and his wife (center-left), and Lt Gen Izutsu, Chief of Staff, Koku-Jieitai and his wife (center-right)

す。本日はこうした皆さんに年末のクリスマスの一時を太平洋空軍バンドの演奏でお楽しみいただきたく思います」と述べられた。



Opening Remarks by Lt Gen Rickey N. Rupp

コロナ感染拡大防止の対策のため（日本政府が関係者に定めている制限を踏まえ）、レセプションの間はマスクを着用すると共に食事の提供は行われず飲み物のみとなったが、招待者が心から楽しみ、大いに工夫されたおもてなしの気持ちを感じることができた。



USAF Band of the Pacific-Asia Pacific Trends

最後に再度ラップ司令官から「コロナ禍で行う今年の企画は、実は私の妻のアイデアで、例年とは異なり太平洋空軍バンドのパフォーマンスを中心とした「ホリデーコンサート」にしました。今日の演奏をしてくれた太平洋空軍バンドを本当に頼もしく思いました。皆さんはお楽しみいただけただけでしょうか？今後の強固な日米同盟の為に、政府や地元自治体の皆さん、日米軍人の皆さんのこれまでのご協力に感謝するとともに、今後とも一層のご協力ご支援を引き続き宜しくお願いします」と挨拶をされてクリスマス・レセプションを結ばれ、我々は一足早いクリスマス気分になりオフィサーズクラブを後にした。



(from left) JAAGA Vice President Tanii, Maj Gen Koshinski, Deputy Commander of 5th Air Force, JAAGA Director Iwamoto

(岩本理事記)

第 374 空輸航空団ホリデーソーシャル

令和 3 年 12 月 11 日（土）横田基地内将校クラブにおいて第 374 空輸航空団司令官アンドリュー J. キャンベル大佐（Col Andrew J. Campbell）夫妻主催によりホリデーソーシャルが開催され、JAAGA 杉山会長ご夫妻及び藤田渉外理事が出席した。



JAAGA President Sugiyama and his wife (left), Col Cambell and his wife (right)

開式にあたり、基地を代表してダン最先任上級曹長（CMSgt Jerry J. Dunn）が来場の招待者等に対して日頃の基地への協力支援に対する感謝の言葉を述べられた後、コロナ禍にあつて様々な感染症対策を講じながらの行事が進められた。

司令官挨拶でキャンベル大佐は、航空自衛隊と共同で実施したミクロネシア諸島でのクリスマス作戦をクルー達とともに実施し大きな成果を得たこと、この作戦を通じてますます航空自衛隊との絆を深められたことが披露された。

更に「基地に着任以来、コロナ禍にあつて基地行事が 1 度も実施できなかったことを残念に思い、毎年 9 月に開催しているフレンドシップ行事を来年は 5 月に実施することで関係者と計画を進めていることを紹介、コロナを克服し多くの皆様に喜んでいただける行事を開催し、日本の皆様との信頼関係の醸成に寄与したい」と述べられた。

今回ホリデーソーシャルでは初めての試みとして、子供たちのダンスやハイスクール生徒のバンド演奏が披露され、式を華やかに彩った。



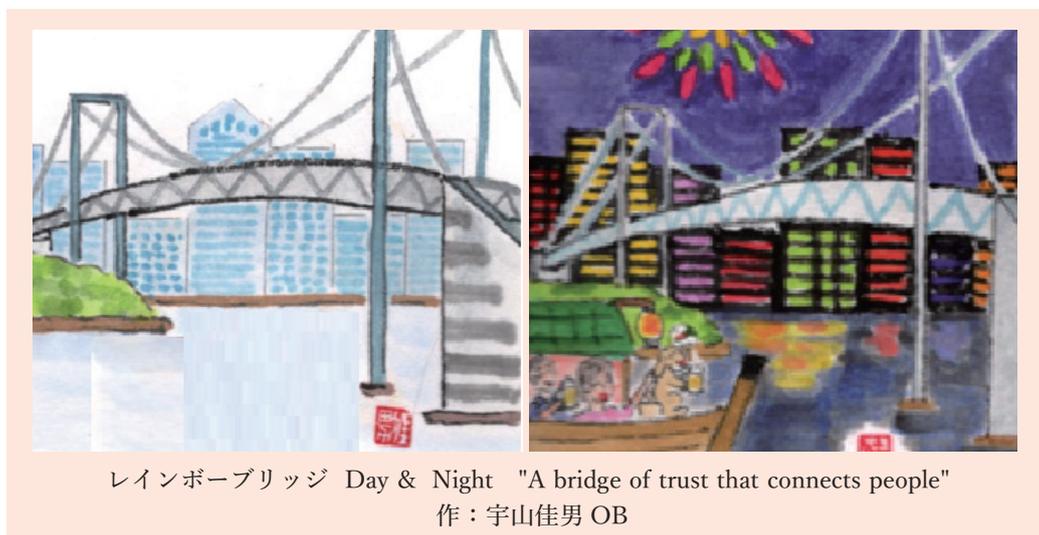
Band performance by high school students

参加者は基地関係者との久しぶりの再会を通じて、今年 1 年を互いに振り返るとともに、新たな年を迎えるにあたって今後ますますの交流を進展させることを約束して会場を後にした。

(藤田理事記)

令和4年度 JAAGA 事業計画

事業項目／実施時期		1 四			2 四			3 四			4 四		
		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
日米隊員の激励等	日米共同訓練参加隊員の激励	←→			←→								
	日米隊員の表彰 (JAAGA AWARD 2022)										←→		
	日米隊員の交流活動 (日米相互特技訓練) 等激励	←									→		
米空軍軍人の日本研修等支援	防大留学米空軍士官学校学生の研修支援				←→			→					
	スペシャルオリンピックスの支援							横田、三沢 ←→					
JAAGA と航空自衛隊・米空軍との交流	SPORTEX'22							←→ A			←→ B		
	指揮官交代行事等への出席	←→			←→			←→			←→		
	米空軍協会 (AFA) 総会への参加等				←→								
	在日米空軍各基地との連携の強化	←→			←→			←→			←→		
	米空軍慶弔への対応	←→			←→			←→			←→		
	関係団体との交流 (JANAFA、横田基地7クラブ等)	←→			←→			←→			←→		
広報及び広報協力	日米要人等の講演										空幕部長等 ←→		
	米空軍基地等の研修				横田 ←→						三沢 ←→		
	日米安保等に関する広報活動 (米空軍広報記事の会報掲載)	↔						↔					
	会報の発行、配布	↔						↔					
	一般広報 (HP 運営、パンフレット作成、グッズ贈呈)	←→			←→			←→			←→		
総会	○ 5/12												
運営管理	会勢拡大等 (会勢拡大、会員管理)	←→			←→			←→			←→		
	支部との連携	←→			←→			←→			←→		
	事務所の運営と備品等の整備	←→			←→			←→			←→		
	会員名簿の作成、配布							↔					
	役員会 (★) 及び理事会 (☆)	☆	☆	★	☆		★	☆	☆	★	☆	☆	★
監査 (会計監査、物品監査)	(R5.4)												
その他	創立 30 周年 (令和 8 年) 記念行事経費積立			←→			←→			←→			



レインボーブリッジ Day & Night "A bridge of trust that connects people"
作：宇山佳男 OB

賛助会員の皆様へ

日頃から JAAGA 設立の趣旨に賛同され当会の活動にご協力いただき、ありがとうございます。三沢基地、横田基地、嘉手納基地の研修に参加された賛助会員の皆様には、当方から所感文の寄稿をお願いし、研修の意義のみならず JAAGA の多様性をも噛みしめられるような味わい深い所感を頂戴しているところです。

このような寄稿に加えて、法人、団体、個人の賛助会員の皆様からの投稿も、幅広く募集しております。

テーマは自由、1 件につき JAAGA だより 1 ページ以内程度（400 ～ 2,000 字程度）、写真、図表等を含めていただいても結構です。細部要領等は広報係からご連絡いたします。

JAAGA 入会に至った経緯、企業・団体の概要、個人の活動等の概要、JAAGA に対する要望、航空自衛隊・米空軍に対する貢献活動等、日米現役隊員に対する期待・激励等、思うところを自由にお書きください。

賛助会員の皆様の積極的な投稿を、お待ちしております！

【法人賛助会員の皆様】 32 社

株式会社 IHI、株式会社 IHI エアロスペース、株式会社石橋オフィスサポート、伊藤忠商事株式会社、有限会社エム、株式会社エクシオテック、沖電気工業株式会社、川崎重工業株式会社、株式会社シー・キューブド・アイ・システムズ、新明和工業株式会社、株式会社 SUBARU、住友商事株式会社、双信商事株式会社、双日株式会社、東京航空計器株式会社、東芝インフラシステムズ株式会社、株式会社日商ファインライフ、日本電気株式会社、日本飛行機株式会社、ノースロップ・グラマン・ジャパン、富士通株式会社、湧上建設工業株式会社、Boeing Japan 株式会社、丸一土地建物株式会社、丸紅エアロスペース株式会社、三菱重工業株式会社、三菱商事マシナリ株式会社、三菱商事株式会社、三菱電機株式会社、三菱プレジジョン株式会社、株式会社武蔵富装、ロッキード マーティン グローバル インコーポレーテッド

【団体賛助会員の皆様】 2 団体

ハイフライト友の会、三沢市防衛協会

【個人賛助会員の皆様】 89 名

投稿募集のご案内

日米エアフォース友好協会（JAAGA）は、お蔭様で令和 4 年 7 月で創立 26 周年を迎えます。日米同盟の深化進展に伴い、日米両軍の絆はより強固なものに発展してまいりました。『JAAGA だより』も、JAAGA 活動の広報と空白、米空軍のサポーターとしての役割を、より一層充実発展させていきたいと考えています。

ご愛読の皆様（会員に限らず現役隊員の皆様）からの投稿は大歓迎です。また、皆様の忌憚のないご意見やご感想も是非お寄せいただきたくお待ちしております。

【連絡先】（郵便） 〒160-0002 東京都新宿区四谷坂町 9 番 7 号

ZEEKS 四谷坂町ビル 3F

日米エアフォース友好協会 広報係

（メール） pubaffair@jaaga.jp

JAAGA グッズの紹介

日米現役の皆さんを応援する「JAAGA だより」を更に多様性に富んだ充実したものにするために、会員の皆様のご協力が必要です。

投稿頂いた方には記念として、「JAAGA グッズ」（男性にはタイピン、女性にはピンブローチ）を謹呈させていただきます。

「JAAGA だよりを私たちと一緒に
作っていきましょう！」

JAAGA 広報係



新入会員紹介

1 正会員 14名

氏名	住所	氏名	住所	氏名	住所
深澤 英一郎	東京都豊島区	劔持 暢子	神奈川県横浜市	佐藤 幸喜	埼玉県川口市
金古 真一	東京都目黒区	上ノ谷 寛	東京都武蔵野市	生田 孝治	神奈川県相模原市
津田 昌隆	東京都練馬区	西野 一行	東京都昭島市	荒木 哲哉	東京都国分寺市
朝倉 讓	東京都杉並区	田實 久志	埼玉県狭山市	菅原 政弘	東京都板橋区
岩崎 仁彦	東京都品川区	有村 誠一郎	埼玉県ふじみ野市		

2 個人賛助会員 6名

氏名	住所	氏名	住所	氏名	住所
菅原 亜樹子	神奈川県川崎市	迫 幸治	沖縄県那覇市	田中 正男	沖縄県沖縄市
大山 哲夫	東京都世田谷区	野中 哲	沖縄県那覇市	岡部 新	沖縄県那覇市

令和4年度 JAAGA 役員

職名	氏名 (緑字：役職変更 青字：新任)	
会長	杉山良行	
副会長	福江広明、上田知元、小野賀三	
監事	内山隆弘、山本祐一	
理事 (筆頭理事以下 五十音順)	理事長	小野賀三 (～ R4.7)、前原弘昭 (R4.8～)
	副理事長	前原弘昭 (～ R4.7 兼務)、武藤茂樹 (R4.8 兼務～)
	企画 (5)	武藤茂樹、荒木淳一、上ノ谷寛、山田真史、増子豊
	総務 (9)	前原弘昭 (～ R4.8)、深瀬尚久、荒木哲哉、荒木文博、井上浩秀、大浦弘容、金古真一、長田国男、三谷直人、山倉幸也 (兼務)、渡邊博史
	渉外 (7)	川口泰志郎、朝倉讓、岩崎仁彦、長島純、藤田信之、村田圭史、吉田浩介
	会員 (4)	今瀬信之、西村弘文、野澤隆一、山倉幸也
	広報 (5)	福永充史、浅井玲、池田五十二、太田徹、竹内由則
	財務 (4)	吉川礼史、大岩卓弥、平元和哉、宮本裕徳
支部役員	支部長	池添孝史 (三沢) 丸野礼治 (沖縄)
	支部事務局長	山本親男 (三沢) 相原弘介 (沖縄)
顧問	岩崎茂、齊藤治和、丸茂吉茂、小野田治、山崎剛美、平田英俊、石野次男、福井正明、清藤勝則、四ツ家邦紀 (ホームページ担当特任)	

JAAGA 退任役員

職名	氏名
副会長	谷井修平
理事	岩本真一、岡本謙一、木村和彦、新谷和也、平塚弘司、平本正法
支部役員	丸山 泰 (三沢支部長)

会員募集

- 今期は、関係各位のご努力で、新たに正会員 14 名、賛助会員 6 名の合計 20 名の入会を得ることができました。
- 令和 4 年 5 月 31 日現在、正会員数 259 名、個人賛助会員数 89 名、団体賛助会員数 2 団体、法人賛助会員数 32 社となっております。
- 今後とも、会員の皆様の勧誘、推薦、情報提供に関するご協力、ご支援を是非とも宜しくお願い致します。なお、本会への入会につきましては、次のとおりです。
推薦、若しくは、情報提供を頂いた方には直接会員担当理事から連絡させていただきます。

【入会資格】

正 会 員：航空自衛隊の OB

賛 助 会 員：航空自衛隊の OB 以外の方。正会員 3 名の推薦が必要です。

【連絡先】

郵 便：〒160-0002

東京都新宿区四谷坂町 9-7 ZEEKS 四谷坂町ビル 3F

日米エアフォース友好協会 会員係

メール：membership@jaaga.jp

編集後記

気がつくと 40 ページの大作に。コロナ禍にあっても JAAGA としてしっかり活動できたことと皆様から協力いただいたおかげで充実した内容になっていると自負します。今号に全ての記事を掲載することができなくて一部は次号に送ることになりましたが、うれしい悲鳴をあげながらコンパクトにまとめるように苦心した編集作業でした。

日本を取り巻く安全保障環境を考えるとウクライナへのロシアの侵攻は他人事ではなく、自ら国を守る力と日米関係の大切さを今更ながら思うところです。

JAAGA の一員として日米関係の強化、深化の一翼を担うことを目標に、個性とチームワークで「だより」の編集に取り組んでいきます。(編集長)

- ◆「喜怒哀楽の毎日、『日々笑進』を胸に口角あげてリラックス」(F)
- ◆「いよいよ夏本番が近づく今日この頃、屋外でマスク姿の人を見かけることも減ってきており、普通の生活のありがたさを実感しています」(A)
- ◆「トンガ王国では『そろばん』が普及しており小学校の正規教育になっています。物事を合理的に考える基礎となりますからね。復興の為に、しっかりとそろばん弾いて欲しいですね」(I)
- ◆「『普通の生活』に戻りあちらこちらに出掛けてみたいですね。まずは夏の北海道でしょうか」(O)
- ◆「今年の夏も暑くなりそうです。毎年なのですが、半年前の前号発行時の寒さを思い出せないことが、本当に不思議です」(T)



作：山本康正 OB

編集担当 (広報理事)：福永充史、浅井玲、池田五十二、太田徹、竹内由則

JAAGA だよりは、JAAGA ホームページからもご覧いただけます (創刊号から第 49 号までは「20 年の歩み」に掲載)。

(JAAGA ホームページ：http://www.jaaga.jp/)